
無双?・・・違います

しろねこi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無双?・・・違います

【Nコード】

N1287K

【作者名】

しろねじい

【あらすじ】

伯父の家へ身を寄せることになった女子中学生。ちよつとチートな家族によって内気で弱気ないじめられっ子に変身していくお話・・・の予定。あくまで予定内容は未定

承前

「ふう・・・さ、入って」

「お邪魔します」

玄関の扉を開けて伯父さんが入るように促した。以前に訪れたことはあるらしいけど自分の記憶には無い場所。

来る途中の動物病院で引き取った三毛猫が部屋に放されてげんな顔でこちらを見る。

「亜美、由美、着替えたらお風呂頼む。それととりあえずお客用の布団、奥の部屋に敷いておいてあげて」

「はい」

「貴美ちゃんは座ってて」

『もしもし、裏の滝沢ですけどお刺身お任せで4人前、上にぎり4人前、ねぎとろ巻2本お願いします』

電話を切ると伯父は祭壇を組み立て、私の両親の遺骨を安置して蠟燭に火をつけた。無言で促す伯父

お線香を立てて手を合わせる。伯父も拜んで、従姉妹の2人も続く。

「先にお風呂入って。シャンプーとかは娘に聞いて、ドライヤーは洗面所の突き当たりに据置のがあるから」

「着替えは脱衣所に置いとくね 洗濯物は横の袋、部屋着は私の

使ってくれば。パジャマはお布団の脇にあるから」

「あの・・・私がお先でいいんですか？」

「ん？全然構わないよ。出前来るまで少しかかるし、明日からの仕事の打ち合わせもあるから」

「それではお先に使わせていただきます」

湯船に浸かって目を閉じる。悪夢のような1週間が頭の中でループを始めた。

学校から帰ったら家が全壊していて消防車が何台も止まっていた景色。伯父がやってくるまで

警察署の一部屋でじっと待っていた景色。ドアが開いて黒いコートを着た伯父を見た後は景色が
ばやけてよく覚えていない。『黙って座ってる』と言われてお通夜も告別式も茶毘に付すときも

紗がかかったような現実ではないような気がしている。

承前（後書き）

はてさて・・・どうなりますやら

環境

「どーするの？お父さん」

「どうするって・・・お前達と同じ。放り出すことはしないし、将来何がやりたいのか決まるまでは見守るよ」

「私達と同じ・・・というかそれしかないよね。きちんと最初のうち親子関係とか説明しないと」

「未成年後見人制度とか面倒なことはさらっと流して後回しにするとして、貴美ちゃんのこれからだね・・・」

ガス爆発で弟夫婦死亡、回収できた家財道具は焦げたアルバムと金庫の中。まあ、転勤で東京に戻る予定で

高校だけは都立に入学が決まって手続きも終了してるのが不幸中の幸いか・・・」

「私達3人の後輩ってことね。偶然だか狙ったんだか」

「それなりに勉強はできるんじゃない？地方の中学から都立で偏差値トップに受かるんだからお前らよりマシ」

「偏差値38からの高校受験・・・どうして黒歴史を思い出させるのかねえ・・・このオヤジは」

「明日は金曜日か・・・俺は午前中出る。1週間空けてるからな。午後は強引に空ける」

「私は午後から出る。由美は抜けられないっしょ？」

「うん。土日は大丈夫だけど明日は無理」

「それじゃ、亜美、午前中頼む。普段着とか下着とか。午後から俺が付き合っつて制服とか靴とか・・・携帯もか」

「制服じゃなくて標準服。寝具や机は土曜日ね。由美ちゃんお願い。これからみんなでリストアップ」

「お風呂先にいただきました。ドライヤーどうやって使えばいいんですか？お釜かぶるの初めてで」

由美さんが来て使い方教えてくれた。凄く強力で私の腰まである髪が10分かからないで乾く。

スキンケア用品も借りて使ったけどいいものらしい。曰く、今からこんな使つと将来苦労するから明日にでも

肌に合ったのを探しに行こうつて。お鮨も届いて食事のの仕度もしてくれたい。

グラス6つ用意して・・・？ご霊前に2つ、伯父さんと従姉妹で3つ・・・私も？？

環境（後書き）

投稿ミスってました（汗）

家族（前書き）

伯父と叔父、小父だと意味が違うし。おじさんとひらがな表記すべきなのか・・・

家族

伯父さんが音頭とって

「献杯」

「あの・・私も飲むんですか？未成年なんですけど」

「飲めるのは弟から聞いてた。大っぴらに飲ませるわけにはいかんけど、

外で飲んで醜態晒すよりはいいんじゃない？」

「父の晩酌にお付き合いしたことはありますけど・・冷酒は初めてです」

「・・・美味しい。今まで飲んだ日本酒と全然違う。ふわっとしたお酒の香りとすーっと通る喉越し。

瀬祭の純米大吟醸ってお酒なんだ。濃厚な雲丹にも、あっさりした白身のお刺身にも

溶け合って嫌味が無い。

両親のことや、中学のこと、卒業式の予定とか話している間に4合壇が空いた。

別の壇が出てきたけどこれもすつきりして美味しい。

磯自慢の大吟醸、静岡のお酒だって。ゆっくりと酔いが回ってくる

「あんまり酔わないうちに自己紹介しとく。俺、滝沢和夫。54歳。仕事は非常勤の勤務医ね。

専門は形成つか『手』」

「私は亜美。見ての通り妹と一卵性双生児。今年で三十路。仕事は病理だけど今、大学院の博士課程」

「由美です。皮膚科が専門で大学病院で勤務中」

「これが我家の猫神様みーちゃんね。20歳以上後は不明」

「ずいぶん若い頃にパパになったんですね。医学部だと学生結婚？」

3人は顔を見合わせて頷いた。みーちゃんを膝に乗せて鮪を食べさせながら伯父さんが

「そっか・・貴美ちゃんが生まれる前の話だからなあ・・お父さんに兄が2人いたって知ってるかな？」

「ええ・・聞いたことはありますけど、一番上の兄さんは私が生まれる前に亡くなったと・・え？」

「そう。兄貴の娘だから血縁としては姪になるんだよ。貴美ちゃんと同じ。」

「でも、お父さんって呼んでるでしょ？叔父さんが正式な関係？」

「大学出るときに養子縁組したから。未成年のときは後見人の叔父さん、

その後叔父さん、その後お父さんね」

「今の貴美ちゃんと同じだよ。俺んとこへ来たのは中二だったけどね。つーことでまだ独身だから」

にやっと笑う伯父。座つてるとごく普通に見えるけど立ち上がると180はありそうな上背。

兄弟だから当たり前かも

しれないけどお父さんと似てる。

伯父のほづがちょっと鋭い顔かもしれない。基本的に無口なのかな。

「ところで明日服とか買いに行くんだけど・・・ブラのサイズ合ってる?」

亜美さんが邪悪な目でこちらを見る

「えっ・・・合ってるはずですけど」

「ん・・・それじゃサイズ測定! 身長は150・・・ついでに測るか。由美、

私の部屋で計測するからメジャー持って来て。」

「ちょ・・・あうあう・・・」

「きりきり立ちませーい。さっさと測定 さっさと測定」

固まっけるところをがっちりと由美さんに確保されてしまった。

双子の姉妹に両脇を抱えられて連行された。CIAに捕まった宇宙人の気持ち

がちょっとだけ理解できる。

伯父は苦笑して座ったままひらひらと手を振ってるし。

連行された部屋は8畳くらい。豪華ってことはないけど落ち着いた暖色系で統一されてる。ベッドと箆笥とチェストに本棚。お医者さんの部屋ってもっと本とがあるのかと思ってた。

「さ、脱いでブラ外して両手をブラのホック外すあたりに持って来て前かがみになって・・
由美測って」

「アンダー65、トップ・・90 65Eね。今着てるのが70Cで不適合。綺麗な胸してるのに下がるよ？」

「研修医やってた時代のサイズだから・・えっと・・未使用のが確か・・これ付けてみて」

「駄目駄目！もっとお肉を胸に回して、ぐいっともっど！ええい！こっやるのよ」

「ひゃん！駄目っ あぐう ぐげっ あうあう・・」

思いつきりブラの中に手を突っ込まれてお肉寄せられてるんですけど。背中から脇から下から・・
ストラップを調整されてちゃんと位置決めされた状態で鏡を見ると谷間が・・谷間が出来てる。
バストトップも上がってるつか巨乳化してる。セーター着ても違いは明らか。

そのまま居間へ降りると伯父さんがこちらを見てちよつと眉を上げた。

「未使用が2人で6枚出てきたから使って。小さいけどスタイルい

いじゃない。

ウエスト57って羨ましいわ。身長もこれから伸びそうだし色白で
きめ細かい肌なのね。

問題は髪というかヘアースタイル。

絶対ショートが似合いそうなんですけどかなり痛んでるのよねえ」

「でも、髪質そのものは悪くないんじゃない？漆黒じゃない・
染めてないよね？緑色入ってる気がする。私もショートに一票」

「眼鏡外して前髪ちよつと上げてみて……ん、この子とんで
もない拾い物かも。

俺もショート支持……コンタクトか縁無し眼鏡にして前髪薄くす
るか上げるかだな。

日曜日にエステも含めて加畑んとくに放り込んでいじってみる？電
話しといてあげるけど。」

「かはた？」

「そう。銀座でサロン・ド・カハタって美容室やってる」

「銀座にあるサロン・ド・カハタ？テレビで見たことあるセレブ御
用達の超高級カリスマ美容室？」

そんなんっ！とんでもなく高いんでしょ？いつも2500円でカット
のみで済ませる中学生が
行くようなところじゃないですよ」

「超高級なカリスマはともかく、大丈夫だよ。高校の同級生で知ら
ないわけでもないし

娘達も年に何回か通ってる……

入学祝ってことでお金の心配しないでいいから。日曜日に3人で行

って磨いてきて。」

「えー」

「「はい」「

「女子高生改造計画って・・・我家はシヨツカーかよ。貴美ちゃん、色々あって疲れてるはずだからそろそろ寝たら？」

明日は9時過ぎに出れば十分だけど、俺と由美は早いし。」

「そうですね、ではおやすみなさい」

唯一の親戚だけど何だかとんでもない家に同居するようになった気がする・・・

その夜、私はスイッチが切れたみたいに寝た。

家族（後書き）

酒と下着のお話になりました。

はっちゃんけるにはそれなりの下地が必要・・・かな？

買い物

「けっこう飲めるね。1合で口が軽くなって2合でちよつと顔に出る。」

3合飲んでも乱れないんだから今年高校生で立派なもんだ。」

「お前達は中学でそのくらい飲めただろうに。血統なんだろうね。大学生になったら何人の男が潰されるのやら」

「潰れた人数なんて覚えてないけど告られて御免なさいした数よりは少ないでしょー」

高校時代私が30人で由美が26人

姉妹間違えて告つたのが8人までは覚えてるけど面倒になって数えるの止めた」

「ふん・・・そのおかげで嫁に行きそびれたのが約二名・・・

ま、明日からよろしく頼む」

「「はい」」

誰かが呼んでる・・・

「貴美ちゃん」

ん・・・夢？ 肩を揺すられて目が醒めたら亜美さんが目の前に

「ふえっ お、おはようございます」

「そろそろ8時半だよー 起きてご飯ね。出かける準備しないと。お疲れみただけどちょっと我慢してね」

貰ったばかりの下着を身に付け、借り物のワンピース。秋田で何枚か買ってもらった下着とシャツ2枚。セーターとコートが衣類の全部だからしかたがないけど、買い物のお金とかどうしよう・・・お小遣いの通帳あるから郵便局で下ろさないと。身つくりしてキッチンへ降りると封筒が差し出された。

「これ、お父さんからとりあえずのお小遣いですって。交通費とか細かいものとかお茶するのにつて」

「あのっ・・・洋服とかお布団とか生活用品はお下がりでも何でもかまいませんから・・・
学費とかアルバイトしないと」

「ああ、一切気にしないでちょうだい。家族の一員になったんだから家族で支えるの当たり前でしょ？
アルバイトはこの家にいれば必然的にするようになるし、それで高校生のお小遣いには十分かな。

必要なものは申告して。歯ブラシ一本から生活用品揃えるんだから抜けがあるのは
当たり前だけど足りない困るんだから」

表通りでタクシーに乗って遊園地に併設されたショッピングモールに連れてこられた。

上に温泉施設やスポーツクラブがあるみたい。

下着屋さんへ引つ張り込まれおどしていると亜美さんがてきばきとぱんつやインナー類を

カゴに入れていく。本人の趣味は無視ですかそうですか・

「ブラのサイズ間違いないと思うけど再確認ね。すみませーん、これ試着お願いしますー」

フィッティングルームに店員さんと一緒に入って再確認。外国製のジャストフィットだと言われた。

ユニクロとか他も廻って大荷物を持って戻り、すぐにまたお出かけ。

「化粧品はね、最初から高級品使ってると将来お金かかりすぎるの。自分の収入で無理なく補充できる金額のにしないと」

なんて言われながら一揃い買ってもらってお昼を食べることになった。

ランチを食べて近くのコーヒーショップに入ると携帯のカatalogを渡されて

「お父さんが来るまでここで待っててね。キャリアはここになるからどの機種が

欲しいか検討しといて。防水がお奨めかな。

それから・標準服とか靴とか値段のことは気にしないこと。おそらく別のものも

買おうって言うけど黙って買ってもらいなさい」

笑いながら亜美さんは席を立った。ふむふむ・・中学では学校に持

ち込み禁止だったし

興味もなかったけどいろんなことができるんだ。

とりあえず通話とメール、テレビも見たいしお財布も使ってみたいけど定期として

使えるのかな？パソコンも無くなってしまったしCDも全滅だった。後、何がいろいろある。教科書と文房具と・・・机とかは何かかなりそうだし、

どこで勉強してもかまわないんだけどな。

自分の居場所は確保してもらえないけどこれ以上望むのは贅沢だと思っ。

これといった公表できる趣味も無いけど、本屋は沢山都内にあるだろうし。

近所にブックオフあるのかな？今度聞いてみようつと。公表できない趣味のほうは・・・

コミケとか近いしとらのあなとか秋葉も行ってみよう。

「お待たせ。行こう」

伯父の声がした。

「はい。制服の指定店ってどこなんですか？」

「日本橋三越」

「へ？」

伯父が手を挙げてタクシーを停める。行き先を先ほどの単語を繰り返して告げた。

「そんなに珍しいことじゃないよ。共学になってから50年位変更されてない制服で指定店も変わってないんじゃないかな？」

売り場に着くとさくつと注文してくれた。

「永田町高校の制服夏冬2着。ワイシャツは7枚、半袖を5枚。サイズがあれば

出来合いで構わないけど無ければオーダー。上履が一足。

こんなもんかな？ ああ、校章も正章と略章と1つずつか」

ワイシャツを着た状態であちこち採寸された後、一着の制服を手渡された。

「これを着てみてください。サイズの基準にはなりますがフィットしないでしょ。

身幅出しても限度があるし1サイズ大きいと丈が合わない。できればイージーオーダーをお奨めします」

更衣室で着替えて出ると伯父が何とも言えない顔を見ていた。店員さんもちよつと困った表情をして袖丈をあわせてる。

カードを取り出しながら

「まあ元々ださい制服ではあるからなあ・・・イージーオーダーをお願いします。

入学式前の納期で大丈夫ですよね？」

「はい。お支払いは一括でよろしいですか？」

「」「ありがとうございます」「」

店員さんの声に送られて売り場を後にする。

「後は靴と携帯かぁ・・・とりあえず銀座へ行くべ。踵の高い靴は履いた事ある？」

「いいえ。ほとんどスニーカーと冬靴くらいで」

「銀座の老舗で買い物するのも社会勉強だわな。慌てないで黙って座ってればいいから」

タクシーの中でそんな話が続いていた。

銀座の靴屋さんの2階。さっきから椅子に座ったまま固まってる。座ったら30代の店員さんが足のサイズを細かく測って伯父さんより年上の店員さんが目の前にさっきからかしずいてる。あの・・・大げさだと思っんですけど。店に入ってきたきよるきよるしてたら伯父さんが店員さんを呼んだ結果がこれ。

「えーっときちんとした通学用のローファーが一足、雨用の合皮が一足。

オーソドックスなパンプスが一足、春夏用のサンダルが一足、スニーカーが一足。

ハイヒールは初めてらしいから選択はお任せ。こんなもんかな？」

「初めてのハイヒールですと余り高さのあるのはお奨めできないですね。最高でも7?でしょうか」

ローファーが何足か持ち出されて次々と試していく。でも、一足二万円近い値札が付いているんですが大丈夫なの？

「あいつ、小娘には高級過ぎないですか？」

「黙ってすわってるのがお約束。一番足に合うのを選んで」

にやりと笑って伯父さんはまだこれから成長するから足に負担がかからないのを
持ってくるように店員さんに促した。

「そうですねえ、これは柔らかくてサイズはお嬢さんの足を木型にしたような靴ですが。」

何これ・・・履くというより足の裏に吸い付いてる感覚なんですけど。

「ぴったりですね。それじゃこの木型を使ったパンプスとサンダルを出してきましょう」

デザインと色を決めると若い店員さんが靴を取りに行く。

履いたまま他の靴も見てくださいと促されあれこれ見るけど値段が怖いんです。

いつもホームセンターみたいなところでスニーカーとか買ってる感覚からすると一桁値段が違うし。

「これなんか可愛いんじゃない？」

サテンピンクで足首をベルトで止めるタイプのサンダルを指差して伯父さんが店員さんと話してる。

「貴美ちゃん、これも履いてみて」

年配の店員さんがかしずいて履かせてくれる。いきなり背が高くなつた気分。

「それじゃ選んだの全部お願いします。パンプスは履いていきますから他は送ってください」

伯父さんが会計を済ませて店を出た。

「あのおっ！警沢すぎると思うんですけどっ」

「ん？金額は気にしないでいいし。まあ・・・靴を買い与えるのはオヤジ全般の楽しみだと覚えとけば問題ないよ。それに店員さんがかしずいてくれたのは特別扱いじゃない。

一人で行っても同じだし、ちゃんと接客してくれる。

金額が高いと感じたかもしれないけど、プロがちゃんとしたものを勧めてくれるのが

銀座つてところだから。履き心地はどう？歩き方はつま先から蹴り出す感じだそうだけど習って練習だね」

今まで履いた靴の中で一番の履き心地だけど・・・

「次は眼科で検眼してコンタクトと眼鏡だ。同級生が眼科やってるからそこで処方箋と使い捨てのお試し貰って秋葉」

はぁ・・疲れてきた

危険？（前書き）

危険？

秋葉原で携帯を決めてそのまま店内を引き回されてる。地デジ対応のPCを

店員さんに説明してもらってると思ったら

「これかこれだね。どっち？」

「え？え~~~~~っ私の？いいんですか？」

「いいんです。居間にテレビ無いから自分の部屋で観てもらおうし。高校生ならPC持って無いと困るでしょ？どっち？」

「こっちで……」

「それじゃ、これください。メモリは最大増設して、アンチウイルスソフトは家にあるから」

そんな調子で目覚まし時計やいくつかの家電製品を買って配送の手続きをして

携帯を受け取って店を出た。

「あの……ありがとうございます。こんなにさせていただいていいんですか？」

「全然かまわないよ。携帯のストラップも買ったし、基本的なことはどんどん言っ。明日は寝具家具だけど遠慮なしね。」

「お下がりでも、使わなくなったものでも大丈夫ですから……」

「15歳年下だからね。流用できるものは少ないし、全滅状態だから気にしない。娘達も遅くなるみたいだから夕飯どうしようか。何か食べたいものある？」

和洋中とかリクエスト。固有名詞でもOK」

「洋風のお肉が食べたいです」

家の近くへ戻って小さなビストロへ入った。メニューの解読というか調理方法が意味不明。ポアレとグリルがどう違うのか出てくる料理のイメージが湧かない。ハンバーグは無いのかハンバーグは……

「ファミレスと値段もほとんど変わらないし女の子一人で食べにきても

大丈夫だから。苦手なものがあれば言ってくれと除外して頼むよ？」

「牛肉が食べたいです。苦手は……らっきょう」

「それじゃ新じゃがのポタージュ、リブステーキのミラノ風、気まぐれサラダだけ1つ。ハウスワインの赤、デカンターで、グラス2つ」

注文が終わって伯父が話を始めた

「色々不安もあると思うけど、相談して。言ってくれないと分から

ないしね。

外側を固めてアドバイスは出来るけどどうするか決めるのは自分身だから。」

「高校の授業に付いていけるかどうか心配です。周りに知り合いがいるわけでもないし・・・上京するときから分かったことですけどね。

全部リセットされたところから始めるのは
過去が切り捨てられることですから逆に気が楽です。」

「授業に関しては大丈夫じゃないかな？合格するだけの学力があるわけだ。

高校の授業ってのはある意味ではお稽古事の範疇を出ない。

職人仕事と同じで経験の積み重ねであるレベルまで到達できる。

過去の切捨てね・・・中学で何かあったのかな？いじめとか？」

「あは・・・分かります？結構きついことされました。

去年の暮れには警察沙汰にもなったけど学校ぐるみで隠蔽してくれました。

合気道の有段者で県警で護身術習ってたから反撃しなかったけど」

「警察沙汰ね。転居先調べて東京までやってくるようなら問題だが
そうでなければ放置して

新しい環境でやり直すのが建設的ではあるが・・・貴美ちゃんはどうしたい？」

「もう忘れてやり直しかな？秋田の前が大阪でしたから訛が心配ですけど訛ってます？」

もちろん学校といじめてくれた連中には少し何かあっていいはずだとは思ってます。」

ワインを飲むのは初めてじゃないけどゆっくり食事して会話しながら飲むのは初めてかな。

お料理も美味しい。ひよっとして飲み方を教えてくれるのかな。

「少し何かか・・・秋田県警ねえ・・・デザートは盛り合わせでOK? 食後はコーヒー?」

「ええ。それでお願いします。って・・・?」

伯父は携帯を取り出して外へ電話をかけにいった。

「ちよつと再調査プツシュしてきた。学校と加害者はちよつと不快な思いするかもしれんけど」

「え?」

「まあ、知らなくていいよ。秋田県警が動くだけだから」

にやりと笑って伯父はデザートに手をつけた。

この人本当は怖いのかも・・・

変身？

「さ、出かけるから。行く時は眼鏡でいいけど、コンタクトも持って来て。」

家を出て銀座へ向かう。姉妹揃ってなんだか嬉しそうにきやきやいしてる様は

どう見ても20代前半にしか見えないんです・伯父は書類の整理や書き物が

あると言って家で荷物を受け取る係を志願してくれた。銀座の裏通り、ビルの3階に

目的の美容室はあった。いかにも・・というか敷居が高くて入りにくいオーラを発散

しているけど彼女達は私の手を引いてためらわずに扉を開けた。

「いらっしゃいませ」

受付に座っていた中年の店員さんが立ち上がりにつこり笑って迎えてくれた。

「3名で予約をお願いしています滝沢です。」

「はい、承っております。通常のコースがお2人とお1人様は初めてだそうです」

「ええ。この子ですけど、父から話は通っているようですね」

「オーナーを呼びますので少々お待ちください」

受付脇のソファに座って待つこと数分・・・
奥からかなり派手目なおじさんが出てきた

「いらっしゃいませー 亜美さん、由美さん。お父さん元気？」

「今日は。父は相変わらず元気ですよ。今日もよろしく願いします。で、この子が貴美です」

「よ、よろしくお願いします」

思わず噛んだ。

「ふむふむ・・・お父さんが自慢するだけのことはあるね。ちょっと鏡の前へ」

・
髪の毛を梳きながらだんだん目つきが変わってきてるんですけど・・・

「30年近く美容関連の仕事してるけどこの髪色は2人目だね・・・絶対に染めたら駄目

悪いんだけどカットモデルやってくれない？私が一番似合うと思う髪型にしてみたい。

料金は無料にするけど、終わってから2時間位の撮影になるかな」

「え？私がモデル？？」

亜美さんのほうを見ると由美さんと何やら話してる。話がまとまっ
たらしく

「エステも予定してるんですけど、そちらも含めてやっていただけ

ますか？」

「ああ、もちろんもちろん！！ 徹底的にやりたい。一髪やらせる・と下品に言ってみる」

「貴美ちゃん、この際だから徹底的にやってもらったら？加畑さんに直接カットしてもらえるなんて、普通じゃまずありえないだし。高校生の髪型って範疇でお願いしてみなさいよ」

あの・・・3人がかりで説得に乗り出しているとしたか思えないんですが。

「でも、どんな髪型が指定できないんですよね？」

「学校で短くするの禁止されてたのかな？そのまま伸ばすだけで痛んだ部分もそのままになつてるからねえ・・・古い言い方だと貞子ヘアになっちゃってる。それが全体にどーんと重く押し掛かっているからね。短くして爽やか系が似合うね。」

「専門家も周りの人もショートが似合うと勧めるし、生活も変わるから髪型も変えるのかな。」

「それじゃショートをお願いします」

「出来る限り可愛くしてあげる」

加畑さんはにつこり笑って矢継ぎ早に指示を出す。

「亜美さん由美さんは特別コースにマツサージ付けて、貴美さんには特別コースと脱毛の

無料サービス券5枚付けて、フェイシャルは念入りに、店長が施術して。上のスタジオ4時から

押さえて。カメラマン呼んで。塞がってる？小スタでも大丈夫だから何とかして。貴美さん

はなるべく早くカットに回ってもらってから脱毛は2人付けて」

「こちらへどうぞ」

受付の人に促されて別のフロアへ案内された

「まず、全身の無駄毛処理から始めます。そちらの更衣室で下着も脱いで

ロッカーの中にあるパンツとガウンに着替えてください」

ぱんつがハイレグで毛がはみ出しそうなんですけど・・・しかも紙でできてる使い捨てだし

ガウンを脱いで施術台に乗るとタオルをかけてくれた。

「最初に手足の産毛からやりますね。薄いからさほどの変化はないように感じるかもしれないですけど両脇とVゾーンはその後。」

「腋毛って脱毛するとその後まったく生えてこないんですか？」

「いいえ、今休眠状態の毛根から発毛しますから。でも4、5回続けるとほとんど生えてこなくなるのが普通です。Vゾーンも心配しないてください。」

水着を着てはみ出さない程度にします。お顔は元々色白で美白の必要もないでしょうけど、産毛の処理とフェイシャルで老廃物を取り除きましょう」

寝て顔にタオルをかけたまま2人がかりでマッサージされてるとしか思えないんですけど。でも気持ちいい。ふんわりとした気分で人の手で触られるのは初体験かも。両手をバンザイする格好にされて両脇の処理が始まった。

「体毛が薄いんですね。施術するほうも楽です。Vゾーンもほんのちよつとで終わります。2ヶ月間隔くらいで通ってくださいね。3、4回で1年さぼれるかも。さ、うつ伏せに」

背中もゆっくりしたペースで撫でられるのも気持ちいい。癖になりそうなのが怖いけど。

顔を触られるのも何となく不安だったけどやっぱり快感。つるつるになった顔にクリームを塗られ服を着て美容室へ戻った。

通された椅子というか・・・個室なんです。

6畳くらいの部屋に必要な器具がセットされてる。

「せっかくの個室なんですけど申し訳ないけど見学者が沢山出入しますから。

オーナーの実技みんな見たいしカットして落ちた髪の毛はくださいね。

店長もこの色の地毛は見たこと無いそうです。」

全体をブラッシングしながら女性の美容師さんが説明してくれた。

「さて、始めましょうか。さっきも説明したけど基本的にショート。高校生というよりも

爽やか系のイメージでまとめます。ロングからショートにするから切る部分はまとめて切って持って帰れるようにしますね。つけ毛に使えるから保管しといてください。」

眼鏡を外されてカットが始まった。この時点でもうほとんど見えな
いけど髪の毛をまとめて肩にかからない長さでざっくりカット。前
髪から始まって両サイド、後、全体へとはさみが入る。

後では手の空いた美容師さんが入れ替わり立ち代り見学してる。そ
の人達に向かって

「縦にはさみを入れれば今風に軽く仕上がるんだけどね。

この髪質の場合には独特の光沢との兼ね合いがあるから難しい。

全体に軽く、しかも光沢を強調したいからこの切り方を使ってる」

「全体に梳かないと髪の毛が多いから軽く仕上がらない。

でも爽やかに光るようにするにはこう・・・」

「カットして落ちた髪の毛見てごらん。本当の意味で碧の黒髪つて
のがこれだ。

落ちた髪の毛は貰うことになってるから少しずつ持ってって」

なんだか物凄く複雑なカットしてるみたい。カットが終わってシャ
ンプブロー。

ごく軽くお化粧してもらってから鏡の無い別の部屋でコンタクトを
付けるように言われた。

加畑さんが正面から見て

「うん。これでよしと。ここ10年での最高傑作。別人28号・
・ふるっ」

元の部屋に戻って鏡を見る・・・

「これって私・・・??」

普通の美容室に出ると美容師さん達が一斉に驚いた表情でこちらを見る。

いきなりぎゅっと抱きしめられて固まってしまった。

「きゃ~~~~~っ！　なんて可愛い生き物なのっ！」

「おねーちゃんずるいつ！私も！！　可愛い~~~~っ！碧よ！碧の
黒髪！！」

左右からむぎゅっと抱きしめられて動きが取れない。

加畑さんが笑いながら止めさせてくれた。

「まあまあ・・・髪の毛は地色ですよ。

カットで虹色というか烏の濡羽色に光るのを強調してるけど。

可愛いのは貴美さん本人。シャンプーとコンディショナー、

ヘアクリームしか使ってないし。

帰りに用意しときますから持って帰って使ってください。それじゃ撮影お願いします」

上のフロアへ移動して撮影がはじまった。モデルなんて経験無いし写真を撮られることも

さほどあったわけではない。こっち向いてとか上向いてとか笑わせられたり服を着替えたり

結構大変。セーラー服とかブレザー、見たことも無い制服でも撮影した。スタイリストの人ってサイズが合わない服でも見えない位置で安全ピンで留めてあつてるようにしてしまふんだ・・・

後で聞いたら制服は有名私立お嬢様学校の制服ばかりですって。ちゃっかり由美さんが画像貰う話をしてみたい。その他ワンピースやミニスカートから

ゴスロリ風の服まで今まで着たことが無いのを次々と変えて撮影された。

「はい、終了です〜 お疲れ様でした〜」

やっと撮影が終わってほっとしていると今回撮影したのを雑誌に使う許可が欲しいとカメラマンに言われた。美容室の広告ならかまわないけど雑誌はどうなんだろうな・・・と考えていたら

「モデルデビューするわけじゃないから大丈夫じゃない？」

反響あつてもスカウトお断りって条件で」

「そうねえ・・・もし掲載されてもモデル不詳にしてもらえば？雑誌は送ってもらうことで」

などと肯定的な意見があつたので掲載はかまわないけど人物不詳で掲載することでOKを出した。

撮影が終わって外に出るとそろそろ暗くなる時間。

なんだかすれ違う人がちらちらこちらを見る。

亜美さん由美さんは美人の上に双子だから目立つんだろっな。

「こらこらっ、ヒールで膝曲げて歩かないっ！」

つま先から蹴り出す感じで胸を張って歩くの。こっ……」

見本を見せて貰いながら銀座の裏通りで歩く練習。きれいに歩くのも大変だ。

でも頭が軽い。首筋がすうすうして寒いけど振り向いただけで髪の毛がふわっと

舞うのが自分ではつきり分かる。

伯父さんが出てくるそうなのでそれまで時間を潰すことになった。

「それにしても髪型と眼鏡でこんなに印象変わる子も珍しいわねえ・

男児がみんな注目してるし。通常はコンタクトでかまわないけど眼鏡も

1つ買い換えないとね。眼科の処方箋持ってる？」

「注目されてるの亜美さん達ですよー私なんて……」

「うんにゃ。視られてるの貴美ちゃんだよ。この先まっすぐの眼鏡屋へ行く

けど何だったら試してみる？10メートル先を他人のふりして歩けばすぐ分かるから」

確かに……見られてる。視線を感じるけどどうして？今までごく普通に歩いていて

注目されるなんてなかったのに。男女問わず私を見てるのを感じるんですけど。

「凄い凄いつ！男だと3割くらい振り返ってるよ！女性でも注目してる人沢山いるし！」

「うーん。これってやばいかも・・渋谷あたりだったらナンパされまくりじゃない？」

眼鏡屋に到着すると姉妹そろって興奮した声をかけてきた。街中で声をかけられたことって

キャッチのおねーさんくらいしか経験ないんですけど。

あれこれ眼鏡を試してみるけど、今持つてる黒縁のは確かに似合わない。でも不細工に見えるからこれはこれでいいのかな。縁なしのチタンフレームがベストと店員さんも含め意見が一致したので買ってもらった。

「入学祝ね。出来上がったら自分で取りに来て。使い捨てのコンタクトは自分で買えるようになったら自分で払って」

でも3ヶ月分一緒に払ってくれてるんですケド・・・

伯父さんがやってきてひと目見るなりぽかんと口を開けたまま固まった。

「加畑から聞いてはいたけどここまで変わるんだ・・・すげー」

「そんなことないですよー中身は変わってないし」

「いや、自分の価値に気が付いてないんだよ。亜美由美のときも美形だと思っただけ」

何というか男が放っておかないタイプというか。亜美由美が若い猫の雰囲気だとすれば
貴美ちゃんはげっ歯類の雰囲気があるんだな。ヤマネとかモモンガとか……」

「そうそう。絶対やばいと思うよ。砂糖に群がる蟻のように男がわらわらと……」

亜美さんが酢豚を取り分けながら言った。

「絶対付き合えとか言われるタイプ。今まで男の子と付き合ったことある？」

由美さんが炒飯を掬いながら聞いてくる。

「いいえ。中学で全然そんなことなかったし、田舎でうるさかったですし」

「はぁ……絶世の美女ではないにしろ間違いなく美少女の範疇なのに免疫なしかぁ……」

「……んー困った」「」

何も声を揃えることもないと思うんだけど、そんなもんなのかなあ？
青菜炒めを食べながらロツクの紹興酒を少しだけいただく。

「亜美さん由美さんだって美人だし大変だったんでしょ？」

「こいつら中二までヤンキーだったから。」

高校生相手にどうなるって玉じゃなかったんだよ」

「え？嘘でしょ？　だって国立の医学部現役で入ってるんだからそんなのつてあり？」

「このおやじは人の黒歴史をそうやってばらすんだからもう・・・」
亜美さんが苦笑しながら咳く

「ま、事実だからね。偏差値38からの都立普通科受験。お父さんの家庭教師のお陰だった。

貴美ちゃんもお父さんに習うといいよ。凄いから」

由美さんが杏仁豆腐食べながら付け足した。

「あのなあ・・・お前らの時でも授業の中身が変わってて苦労したんだぞ？今時の高校で何やってるか全然知らんし、もう時代遅れだろ」

「そんなことないよ。どこで何が分からなくなって躓いてるかを見つけてそこを指摘できるって今にして思えばとんでもない才能だよ？しかも相手のレベルまで降りて教えられるのは。東大の理？は伊達じゃないでしょー」

「ふん・・・家から歩いて通える一番近い学校が芸大か東大だったからだ。お前らはバス通学だったよな」

「浪人はしたくなかったし、私立は論外。ちょっとへたれたのは事実だけだよ・・・」
「やっぱ総合大学のほうが良かったかなと今はちよつと思ってる。」

「ま、お前達を選んだことだからな。肩書きは変わらないし大丈夫

だろ」

「あの・・・家から近いのが大学の選択基準だったんですか？それで東大と東京医科歯科？」

「そうだけど、何か？」

「この人達絶対ちよつと変・・・」

変身？（後書き）

変な家庭の変な家族紹介はそろそろ終わり。

次からいじめられていた芋虫が華麗な蝶々に変身する・・・かな？

段取

東京に知り合いがいるわけでもないし、友達がいるわけでもない。伯父も従姉妹も仕事しているから昼間は荷物の整理やパソコンいじる程度。

歩いて15分程のところにブックオフがあるし、神保町や秋葉原へ30分も

かからないで行けるのはありがたいけど、そうそう遊びまわっているわけにも

いかないから掃除を始めてみた。

元々が祖父の診療所兼住宅だった家を改築しているからいささか広い。

7LDKになるのかな？トイレは2カ所あるし、お風呂の他にシャワールームや洗濯室まであるのは診療所の名残りらしい。

個人のスペースは除いて掃除機をかけて拭き掃除をして行く。

周りは寺町、すぐ近くは商店街がある本当の意味での下町だそう。昼間でもさほど人通りのあるところではないし、夜になるとここが日本橋から5キロ

くらいというのが信じられない。あまり手入れされていない小さな庭があるから今度いじってみようっと。

庭から道路に落ちた椿の花が気になったので道路を掃いていると隣のお婆さんに声をかけられた。

「こんにちは。若いのにちゃんと掃除するのね」

「こんにちは。いえいえ、ちょっと手が空いたもんですから」

「そんなことないですよ。家の孫なんか全然やらないうで遊んでばっ

かり」

この前伯父に連れられて向こう3軒両隣にはご挨拶してるから初対面ではない
でもお孫さんは合わなかった。

「お孫さん？この前はお目にかからなかったようですけど」

「今、大学の関係で藤沢に下宿してるのよ。全然帰ってこないし帰ってきててもすぐ出かけるの」

「下宿ですか。一人暮らしも苦手な人だと大変みたいですね」

「全然。今はコンビニとかあるじゃない。自炊もしないで何とかなっちゃうみたいね。上の孫は筑波の研究所とかへ行ってこれまた滅多に帰ってこないのよ。」

「男性はやっぱり外に出てしまっくんでしょうね。」

従姉妹達はまだこの家にいるみだいですけど」

「そうねえ・・・下の孫はよく亜美ちゃん由美ちゃんに遊んでもらってた」

上品に笑いながらお婆さんは続ける。

「7歳年下だから喧嘩にもならなかったわ。
上のは2歳下でよく勉強教えてもらってた」

「へえ・・・そうなんですか。従姉妹は秀才だとは聞いてましたけど」

「少なくともあの2人が中学卒業したときより貴女のほうが綺麗よ。それじゃまた」

「失礼します」

お婆さんは待たせていた黒塗りの車で出かけていった。

.....

家に帰ってコーヒーを淹れる。パウンドケーキを1センチほど切っておやつにしよう。

お菓子に不自由しない家だけど油断していると間違いなく太る。

夕飯の支度は冷蔵庫の中身で大丈夫だからご飯だけセットすれば後は6時過ぎに作れば大丈夫だし筑前煮だけ作って味をしみ込ませとこうと。

卒業式かぁ・・・今週末だけど本当は出たくない。

尊敬できない担任といじめてくれた奴の顔は見るのも嫌だ。

このまま東京へフェードアウトしたいな。伯父は何て言うかな。とりあえず相談してみよう。

伯父と亜美さんが7時過ぎに帰宅した。由美さんは遅くなるみたい。夕飯は好評だったので安心した。卒業式の話の切り出してみる。

「あの・・・卒業式で秋田行くのも大変だし、制服も燃えちゃってるんで

式に出るのも恥ずかしいんですけど」

「前日に行ってホテル泊まりで翌日出席して帰るってことで考えてたんだが・・・

飛行機とホテルは確保してあるし、制服ねえ・・・」

「何を着ていけば良いのか判らないし悪目立ちしたくないのも・・・

」

「で、それが本当の理由？」

伯父が諧謔の籠った、それでいて真面目なような目をしてこちらを見る

「えっと・・・本当は担任といじめてくれた奴らにもう合いたくないのが本心です」

「・・・あのさ・・・」

亜美さんが伊予甘の皮を剥きながら話し出した。

「別に私がどうこうしろとは言えないけど、このまま中学時代の負け犬引きずって

生きてくつもり？復讐しろとかやりかえせなんて自分が嫌な思いすることは

やらなくていいけどね。これからの自分がどこへ行くのか見せつけるくらいは

やっていいと思うでしょ」

もぐもぐと伊予甘を食べて続ける

「それに、これから高校から先、大学、社会人になったらもっと陰湿で悪意のあるいじめに遭遇しないと限らない。

その時に胸を張って弾き返した経験があるのと無いのでは心構えと対応の強さが全然違うはずだよ。

心療内科は臨床まで少しやっただけの新米だけど医者としてアドバイスできる」

「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ・・・アニメのセリフだが、俺も同意見だな」

伯父が紅茶を入れながら話す。ティーカップに注ぎ分けて勧めてくれた。

同じ葉を使ってどうしてこんなに差が出るのか不思議な一品。

「悪目立ちいいんじゃない？式の練習に参加していないんだから動作なんざ

ばつくれりゃいいだけの話だし、相手の目を見て帰ってくるだけで効果あるはずだよそれに・・・」

「でも、担任まで一緒になってやってるんですよ？警察沙汰も口裏合わせて

無いことにするような相手です」

「担任つて、どんな奴？具体例を挙げて説明してくれないかな？」

「日教組のバリバリ、竹島が韓国領土だって教えてるくらい。えこひいき凄いのが特徴でしょうか」

「ふん・・よくいるタイプだな。また最後にいじめられるのが怖いのかな？」

実際問題として卒業式の最中にどうこうは無理だろ。

問題は前後だが前は教室に集合してから式次第だから時間的に無理。終わった後で担任も含めて問題を起こしてくれればそれはそれで楽しいことにしてあげるよ。

挑発するわけじゃないけどその程度で切れるようなら扱いやすい」

「でも、伯父さんが悪者になるようなことがあると困るし・・・」

「ああ、それはない。危ないこともしないし、家族を守るのは当たり前前の

義務でしょ。大人がやらなきゃならないことってのがあるんだから心配しないで任せとけ」

えぐえぐと泣いていたら何やら2人で話していた。

「ほんじゃ、行ってみよう。中学の制服はいらないようにする。何を着るかはちょっと待って」

「ただいまー あー疲れた　・・・って何で泣いてるの？」

由美さんが帰ってきて状況不明でぼかんとしてる。

赫々云々と亜美さんが説明しながら自分の部屋へ戻っていった。由美さんが部屋着に着替えて降りてきた。

スーッらしきものがハンガー付きで袋ごと渡された。

「スーッってのもまだ無理があるし、作ってる標準服は間に合わないでしょ。」

お古だけどこれ着てみて。高校卒業した時に身長155だったから今の貴美ちゃん

3?しか違わない。問題は胸だね。

スカートの長さは規定が無いからちよつと短いかも。おねえちゃんのスカートのほうが

長いかな。上着は後輩にあげちゃって無いんだって」

「つかねえ・・・ボタン全部持っていかれて涙目で上着くれと言われ
たからね。

Yシャツは新品が届いてるでしょ? さくつと着替えて見せて」

部屋に戻って着替えてみる。このスカート・・・膝上15?になる
けど

いくらなんでも短くない?亜美さんのスカートは膝上5?。

それでも中学の規定より短いんですが。上着を着てみる。

ウエスト、肩幅、袖丈は問題なしだけど胸周りがちよつときつい。

身体の線がもろに出てる感じ。白いソックスを履いて居間に降りる。

「あ・・・こんな風になりましたけど」

居間の姿見にローファアを履いて映してみる。

「うん。デパートでお仕着せ着たのより全然良いよ。まあ、選択肢
はこれしかないな」

伯父が目を細めながら褒めてくれる。

「きゃ~~~~~っ!可愛いつ!私達にもこんな時代があったのね
え・・・」

「ふん・・・髪型まで統一して学校で混乱引き起こしてたのが何いつてんだか

ああ・・・そうだ忘れてるのがあるぞ」

伯父は自分の部屋へ行ってすぐ戻ってきた。

「これを付けなさい」

渡されたのは七宝焼の校章。

「私達のはもう塗装仕上げになってるんだよね。お父さんの下地が臙脂で

私達の時代は明るい色調なの。

貴美ちゃんのはもっと明るい朱色に近いのになるかもしれないけど、古いのが重みがあつていいよね」

「学年章とかクラス章は無いから。これだけが識別になるかな。

夏場は略章付けない奴も多いから何処の生徒か不明になるんだな・・・これが」

「一番無難で、一番見た相手に嫌味になる服。新品じゃないけどこれで胸張って卒業式」

涙が出てきてえぐえぐが止まらなくなった。

「ありがとうございました・・・」

「もう泣くな。顔を上げて胸を張って行こう。中学の連中が絶対きることが無い服だし今年の卒業生が公立高校でナンバーワンの実績作ってくれたからね。嫉みと陰湿な連中をぶつとばすつもりで・・・

な
」

部屋に戻っても涙が止まらなかった。

段取（後書き）

いけませんねえ・・・誤字脱字。
修正しました。

動画

東京では桜が咲いているのにここは鉛色の空と湿った雪。

高校の制服と薄手のスプリングコートに婆シャツだとまだ寒い泊まっていたホテルから5分もかからないで中学に着く。

自分の中で嫌な記憶が甦ってくるのが良く分かるんだけど、何か違和感がある。何だろう？半月前だったら足が竦んだり恐怖感で家が出るのも嫌だったんだけど、今は何の感情もなく見ていられる。後2時間半で卒業式が終わったら良い思い出がまったくなかったこの町から出て行くんだ。

そこまで馬鹿だとは思わないが万が一ってこともあるからと超小型のビデオレコーダーを何台か身に付けさせられた上にボールペン型の隠し撮りができるのが胸のポケットに刺さった状態で稼動してるし、携帯を使った通信システムもスタンバイ。

「さ、行くつか」

伯父に促されて校門へ向かうと懐かしい顔を見つけた

「師範、先輩、おはようございます。お仕事ですか？」

「ああ、滝沢さんかあ！誰だか分からなかった。おはよう！卒業おめでとございます」

「ありがとうございます。・・こちらが私の伯父と従姉妹です。こちら合気道でお世話になっていた師範と先輩です」

「これはこれは・・・貴美がお世話になりました。急なことでご挨拶もできずに東京へ転居することになりました」

如才なく伯父と従姉妹が挨拶する。

「今日は警察官としての仕事ですよ。何もなければそれで良いんですけどね

マスクも取材に来てるし。雪があるから族が乗り付ける可能性も薄いです

・・・それにしても大変身だねえ・・・声かけられなかったら分からなかったよ」

「中学の制服も無いですからね。服が違うのは教育委員会のお墨付き」

持参した上履きに履き替えて伯父達と別れて教室へ向かう。

「それじゃ行ってきます」

「うん。しっかり顔見てこい」

伯父が私の頭をぽんぽんと叩く

「まあ、もちつけ」

亜美さんが両肩をぎゅっと握ってくれる

「いつけー」

由美さんがお尻をぽんと叩く

ゆっくり歩いて教室の入り口に立ち、深呼吸して扉を開けた瞬間ざわついていた教室が一瞬にして静まりかえる。みんなこちらを見てるけど見慣れない制服を着ているのが誰だか認識できないみたい。

さっさと自分の席に座る。机の中もロッカーの中も全部持ち出してるから

再チェックの必要もない。隣の女子が恐る恐る声をかけてきた。

「た、滝沢さん？」

「そ。髪切ってコンタクトにただけだけ」

「嘘ー。言われないと分からないよ！知らない制服だし」

わらわらと女子が集まってきて矢継ぎ早の質問責め

東京の学校？一人暮らし？何処に住むの？髪の毛染めた？e t c ,
e t c

「これ都立高校の制服。伯父のところに世話になってる。これ地毛」

こちらはわいわい話してるけどいじめた奴等はひと塊になって

こちらを見ながら小声で何か話している。なんだ、やっぱり

人目があると何もできないヘタレだったんだ。

どうして今までの程度の連中が怖かったんだらう？

自分の中で気がつかないでいたスイッチがかちりと入った。

担任が教室にやってきて目が合ったけど、挙動不審でおどおどと目を逸らす。何かあったのかな？

「えー最後のホームルームを始める。最後の出欠だな。返事の後で

立って行き先言ってくれ。後でプリントしたの配るけど恒例だからな」

「相沢英明」

「はい。秋田南」

「五十嵐有紀」

「はい。秋田」

「……」

「……」

「滝沢貴美」

「はい。永田町」

「一瞬教室の空気が凍ったみたい。担任がこちらを見る。」

「都立だよな？それが制服か」

「はい」

まっすぐ目を見据えて返事ができる自分に驚いている。頑張れ自分

「スカート少し短くね？」

「制服じゃなくて標準服ですから。スカートの長さは規定が無いそ

うです」

「ま、いつか。おめでとう。・・・で・・・津山雅彦」

「はい。秋田北」

目を逸らすようにして出欠の続きをやってる。傲岸不遜組合マンセーに

何があつたんだろう？

「・・・ということと最後の学校行事、卒業式だ。締まっていくべ」

全員立ち上がって体育館に向かう。予行練習とか全然出てないけど大丈夫かなあ・・・

.....

うん。転ばなかったし歌は口パクで誤魔化したし。

卒業証書と証明書は貰ったからもう用はないんだけど奴等が最後からんできた。空き教室に連れ込まれて

生意気だの何だの例によつて難癖つけてるつもりなんだろうけど

チンピラ以下がいきがつてるとしか見えないんですが

刃物持ち出さない限りきゃーとか怖いとか止めてとか

騒げと言われてるけど誰も来ない。殴られたら痛いとか

騒げって・・・どうしたんだろ？とうとうカッターナイフ

ポケットから出して脅かしかけてきたんですが。

人の顔切るですって？胸倉掴んでそれは無いでしょう。

師匠も言っただけ。

『やるしかないときはやれ。最初の一撃で全力を出せ』

息を吐きながら腰を落す。胸倉掴まれてるから首が絞まるけど気にしない。左手で奴のカッターナイフを握った手首を押さえて右手の掌底一発。ストローク大きいと首の骨折りかねないからほんの100?。周りも何やったか見えないし。

「ぐえっ」

脳震盪起こした瞬間に右手をひねり上げてカッターナイフを落とすと同時に巻き込んでおもしろいっけり投げ飛ばしてやった。

頭から落すと危ないから肩から落ちてもらったけど白目剥いて失神してる。

「このっ」

取り巻き連中が啞然としながらも周りを囲む。5:1だと手加減できないな・・・

「そこまでっ！ 動くなっ」

師範と先輩が入ってきて止めてくれた。

「こいつが投げ飛ばして暴れたんですよ」

腰巾着が人を指差して原因を捏造する。

「「「「そっだそっだ」」」」

回りも調子に乗って自分達はいい子を演じているつもりらしい。刃物振り回していたのは意識が戻ったけど何が起きたか理解していない

「それじゃこちらで一人ずつ話聞こうか」

校長室の前に椅子が離して置かれ一人ずつ事情聴取された。

「失礼します」

校長室に入ると校長、教頭、担任、警部補の師範の他に伯父と従姉妹がいた。

「すまん。本当にあそこまで馬鹿が揃ってるとは思ってなかった。亜美由美押し留めるのに手間取ってしまったんだよ。とりあえず胸のペンカメラ貸して

亜美由美、診断書書いて。刑事告発に必要なだから」

「ふん・・・相手が刃物持ってるのが分かったから乱入してぶつとばそうと思ってたのに。貴美ちゃん大丈夫？こっちへ」

パーティションの陰で怪我が無いかざつとチェックされた。

「腹部を殴ってるんだね。顔だとすぐばれるからか・・・陰湿だわ」

「痛む？全治2週間ってとこだね。しばらく安静にして要観察つと」

「今までやられたのに比べれば大したことないです・・・でもあんな程度の低い

奴等にいじめられてたなんて嘘みたい。刃物取り上げるつもりで払ったら

簡単に飛んだし。」

伯父がペンをパソコンのUSBに接続して動画を関係者に見せている。

「言いがかりをつけて教室から誘い出すところからいじめ、暴行、刃物を

取り出したので抵抗して手首押さえられて払われるとここまで鮮明に映ってますね。

刑事告発の証拠として十分だと思います。医師の作成した診断書、後は

供述調書で我々の提出物は全てですね？」

伯父が警部補に対して確認していた。

校長が青い顔して伯父に抗議する

「卒業式当日の不祥事で申し訳ありません。生徒の将来もありますのでここは

穏便な処理を・・・」

校長の言葉を遮り伯父が反論する。

「去年も同じ生徒達が問題を起こして刑事告発見送ってますよね？学校に提出した

証拠や書類が警察に廻っていないともれ聞いていますが？で、あの連中をこのまま

高校へ送り出し問題を先送りすると・・・。」

「それは・・・」

「自己防衛ですか？当然管理職としての責任は問われるわけですね。

担任の先生はいじめを見てみぬふりをしていた・・・っ」と

担任が堪りかねて私に向かって怒鳴りだした

「知るかポケエ！毎回俺に逆らいやがって！気に喰わないんだよ！」

ずっと亜美さん由美さんが私の前に割り込む・・・アーモンド形の大きな目が

釣りあがってから細められた。瞳の色が無い・・・まじで怖い。

大きな猫科の動物が怒ってる

「本音が出たわね。この無能教師が」

「ひっ・・・お前らが何騒いでも組合員だから首にはできねえんだよ！」

にやーと由美さんが笑って桜色の唇をつりあげた。

「はいはい、ワロスワロス。いじめを放置して怪我しても放置していた

教師が報道されて叩かれるのを組合が助けるとでも？おめでてーな鑑識の車追尾してきたのかねーマスコミの人間らしきのが校内に入ってきてるけどさあ。卒業式の日にいじめがからんだ傷害事件！格好のネタだねえ」

「ぐう・・・」

担任が真っ赤な顔で口ごもる。ここまで馬鹿なのが先生やってるなんて

どこか間違ってるんでしょうけど。見ていて悲しくなってきた。

「分かった！ 謝る、謝るからっ」

担任は2人に向かって頭を下げた。

「はぁ？何ボケかましてんの？この無能が。謝るのは貴美に対してでしょうに！」

「分かった！すまなかつた！」

担任がこちらへ頭を下げる。頭の中が空になって勝手に言葉が紡ぎ出される

「先生、服装が乱れてますよ。。服装の乱れは心の乱れ、反省だけなら猿でもできる

これ、先生の決めセリフでしたよね・・・いつも生徒に反省させるときどんな格好

させてましたっけ？ その格好で反省してもらえます？ まさか自分でできないポーズを

生徒に強要していたってことはないですよね」

頭の血管が切れそうな顔色で正座する担任。でも見苦しいだけ、美しくないな

「校長教頭は教育上の指導として許可していたってことですか。で、管理職として

生徒に対する反省の上謝罪はいつしよになさらないんですかあ？」

雁首揃えて3人土下座。でも全然すつきりしない。謝罪されても忌まわしい記憶は消えないんだ。

「ふっ・・・無様ね・・・謝罪してもらっても気分悪いだけだからもうお終い」

30分ほどかかって調書を取られた。伯父も同席してくれたけど正直に答えなさいと言つて後は黙っていてくれた。最後に容疑者に対する処分をどうしたいか

聞かれたけど少年法のからみで重罰は無いみたい。でも、厳罰に処してくださいと言つた。終わつて部屋を出ると亜美さんが動画のコピーを警部補に渡すところだった。

「ああ、お疲れ様でした。せつかくの卒業式が大変なことになったねえ・・・でもこれで終わりですから帰つてかまいませんよ」

警部補が続ける。

「前回の件は別ルートから証拠の収集ができましたので立件する方針です。今回の件は暴行と銃刀法違反、傷害未遂、同帮助、犯人隠匿と悪質で動画の証拠付です。一人ずつ保護者同席で動画見せたら全員簡単に自供

しました。主犯格は保護施設にお泊りです」

「あのう・・・私が払ったのも傷害罪になるんでしょうか？」

「刃物持ち出して脅かされ刃物取り押さえようとして抵抗して投げただけだから

正当防衛。あの動画見て起訴できる検事はいないでしょう。公判担当する検事では

ないですけど、証人として呼ばれる可能性もほとんど無いでしょう。さっさと忘れて

新しい生活になじんでください。もし合気道と護身術続けるなら東京の道場紹介

しますから」

「大変お世話になりました」

タクシーに乗り込む前に伯父が師範に深々と頭を下げる。私達も慌ててそれに倣う。

「「「ありがとうございます」」」

「いい人達にめぐり合えたみたいだね これからも頑張って！」

師範も深々と答礼してタクシーを見送ってくれた。

「はあ・・・終わった・・・腹減ったけど空港で何か食う時間あるかね？」

伯父がのんびりした口調で呟く

「つたく・・・搭乗まで1時間以上あるから大丈夫でしょ」

「あのう・・・奴等は学校どうなるんでしょう?」

最後まで気になってたことを口にしてみる

「気にすることもないんじゃない?関係ないし。中学は卒業、高校で退学は無いな」

「そうですね・・・良かった」

亜美さんが猫科の笑いを浮かべながら付け足す

「確かに・・・入学取り消されりゃ退学のしようがないか」

「え?入学取り消し?」

「まあ、高校で欲しい生徒でないことは確かだな。警察は高校に連絡する必要は無いし

高校が個々の生徒に関して警察に調査依頼することもないからそのままか。

でも、今度警察沙汰何かやらかすと普通の生徒と扱いが違っだろうね。抑止力にはなるよ」

「いじめられてやりかえすのも嫌なもんでしょ?自分が悪くなくても何か動けば

自分が傷つくし。やっぱりちゃんと周りと付き合わないとね」

「ですねー結果的に投げ飛ばして罾にかけたようなもんだけと面白

くもなんともなかった」

「だね。高校で友達ができるとは思っけどさ、彼氏はどうよ？」

「さあ？予定は未定だし・・・」

「とりあえず最初から携帯とアドレス聞いてくるのはパス。名乗らないのも同じだね」

「きりたんぽ食べて酒飲む時間はあるかなあ・・・秋田には大吟醸で秀吉という酒があっただな・・・」

この人達で助かったのは事実だけどやっぱり変・・・・・・・・・・

入学

桜吹雪の中、私はちょっと緊張しつつ坂を登っている。

通称遅刻坂というらしいけど高層ビルとビルの間挟まれたちよつと急な坂道。ここ何年かまとまった積雪は無いらしいけど雪が降ったらしんどそうだな。本来の通学路だと通る必要が無い坂だけどこつちから上がる生徒も多いらしい。

入学式は一時間半後なのに集合時間が早い。

クラス分けとかそんなので時間かかるんだろう、

伯父達は懐かしいけど遊んでた店が無いとばやきつつ

どっかでお茶してくるらしい。

坂を上りきって右側が正門、ソメイヨシノが植わっているのは

学校のお約束かな。伯父の時代は現在の校舎と違って、エアコンも上履きと履き替える場所も無かったそうだけど、従姉妹の年代だと学食も完備してたそうだ。エアコン無し、暖房はスチーム、プールは穴が開いてて使えなかったとか本当なのかなあ？

68

持参の上履きに履き替えて校庭に出るとクラスの割り振りが張り出してあった。

新入生が群がって喜んだり悲しんだり・・・同じ中学から来るとそれなりに

あるんだろうけど、私には縁の無い話だ。えーつと・・・5組。出席番号24番。

これが1年生としての居場所かあ。貼りだしてある指示に従って教室に入って

番号の貼ってある椅子に座って待つ。回りも8割がた座ってるけど緊張してる

らしく誰も話してない。周りの顔を認識する余裕もないことに気が付いて周りを

見回す。募集要項にあったとおり男子の比率が多少高いのかな。昔は女子が3割強だったらしいから徐々に増えてる。お行儀が良いというか

静かというか・・・がさつさが無いのと馴れ馴れしさが無いんだ。女子高だとスカートの中を下敷きで扇ぐとかあるらしいけど共学だとありえないし

男子も女子の前だと大人しい・・・らしいけど本当かな。中学だとしても無いのがいたけど。

そんなことを考えていたら斜め後ろの女の子から声かけられた。

「あの・・・私、細川、細川かすみです、よろしくね」

「はいっ 滝沢貴美ですっ 秋田から来たんで良く分かりませんがよろしくです」

うん・・・噛まなかったぞ。

「え・・・ご家族の転勤が何か？」

「伯父のところで世話になってますから。生まれは東京ですけど小学校は大阪

中学は秋田、です。大阪弁と秋田弁が混じって変かも・・・」

「ううん、全然気にならないから大丈夫。ところで髪の毛染めてるの？」

「これ地毛ですよ。珍しい色らしいですけど」

「へえー 見たこと無い色だから注目してたんだ。あ、私、陣内瑞恵です。」

割り込んじやったけどよろしく」

それぞれ自己紹介してたら担任がやってきた。

「はいはい。とりあえず座って。担任の吉田宏といいます。担当は化学ね」

40位かな。眼鏡をかけた優しげな先生。まあどうなのかはまだ分からないけど。

「入学式まで1時間ちよつとあるから一人ずつ自己紹介。最初から顔と名前が

一致するわきゃないけど、やらないのも無理があるからな。それじや・・・

一番最後の渡辺君から」

入学式が終わったならそのまま解散つてのはよく分からない。父兄と記念撮影

したりしながら三々五々帰る。これは伯父の時代から変わらないらしい。

従姉妹達が何か話が長引いているから待ってるようにメールが来たから

校庭のベンチに座っていたらいきなり呼ばれた。

「あ・・・僕と付き合ってもらえませんか？」

ふむふむ・・・これがナンパというものですか。告るといっなのは違うんだろうな

ちよつとイケメン風だけどチャライ。・・・ところでこの人誰？

「……どちら様でしょう?」

「あ……3組の川島雄二といます」

「で、私の名前はご存知なんですか?」

「細川さんですよ?」

「言われるまで名乗らず、人の名前も覚えていないし、話したこともない相手に付き合えと?」

「あ……違いましたか?お名前は?」

「こいつ馬鹿じゃね?」

「ごめんなさい。名乗るほどの者じゃないですから。失礼します」

従姉妹が戻ったので坂を下ったところで先ほどの話をしてみる

「さっそく来たのねー 入学式からかあ」

「キタ (。(。(。!!!って名前も確認しないで付き合えって 慌ててたのかねえ……可愛い男の子じゃない。どうするの?」

「どうするって、ごめんなさいしましたケド……どうしてこうなるんでしょ?

この前秋葉原に買い物に行ったら大きいお兄さん達に写真撮らせてくれて

何回も頼まれたし、メイド喫茶の店員さんにバイトしないかって言

われたし」

「どうしてって・・・そりゃとりあえず見た目でしょー 会話したこともないのに
付き合えってのはそれだけしかないよねー」

「中身はどうでもいいってこと？ 何だか馬鹿にされてるみたい」

外見は確かに変わってるけど中の人が変化したとは思ってない。
相変わらず自分を表現するのが苦手でどんくさいのが実際のところ。

「あのさあ・・・近頃はやりの一山いくらで売ってるアイドルグループあるでしょ？」

あんなのより絶対可愛いから。個々で比較してたら全部撃破できるよ。むしろ
ストーカーとかまとわり付かないか心配なの。」

亜美さんが真面目な顔になって言う。

「話したっけ？ 私達、高校時代わざと髪型同じにしてたって。クラスの中や親しい

ところでは見分けが付いたけどそれ以外では混乱させるのが簡単だったのはストーカー

対策もあつたのよ。お父さんのとこに来て、外見だけじゃなくて自分磨きしだしてから

かな。人生最高のモテ期に突入したのは。付き合えってのを毎週振り払ってただけだね

別の男子校の子がストーカーになっちゃって・・・諦めさせるのに苦労したよ。

途中で入れ替わって振り切るつもりが彼は警察のお世話になっちゃ

「ただけど」

由美さんが携帯をいじりながら付け足す

「お父さんは教頭先生が後輩だと気が付いたんでちょっと話してくるって。」

「ちょっと話すんだかちょっと首絞めるんだか知らんけど・・・ベルビー赤坂あたりで遊んでってくれて。お昼何がいいか決めといってくれ・・・だそうよ」

「おねーさん、最初から脅かしてもしょうがないでしょ。今は携帯とかメールで簡単に連絡取れる時代だからそこらへんだけ気をつけとけば大丈夫じゃないかな。電話番号と」

「メルアド簡単に教えないのと、どうして貴美ちゃんと付き合いたいのか聞いて可愛いと言われたら外見だけですか？と問い返してにっこり笑ってごめんなさいでいいんじゃない？」

「あー別に男の子と付き合うってことじゃないからね。それはそれで楽しいし、」

「お父さんもそこらへんは寛容だから。『門限無し。ただし遅くなるなら連絡しろ』だし」

「腹ボテで相談に来ないように』だったっけ」

顔が赤くなる話を歩きながら平気でするのが困る。

「ちょ・・・エスカレーターに乗りながら公衆の面前でするような話では」

由美さんが耳元で囁くように

「高校1年のGW明けだったかな。居間の机の上にコンドームが置いてあって
失敗するなってメモが付いてたし。必要ならあげるからいつでも言う
ってね」

自分の耳まで真っ赤になってるのがわかるけどどう反応すれば良い
のかな・・・
いじられてるの分かってるけどしゃれた返事はできそうもない。

「もうっ、今のところ不要ですっ」

「ふむふむ・・・近い将来に必要なになるっ」と

2人して意地悪なんだからもう・・・

「冗談はともかく安売りすることもないよ。ぴちぴちだし今までの
15年より

いい男が出てくるのは確実だからね。で、お昼何が食べたい？」

「赤坂だしおごり確定だからうなぎでどう？」

「うなぎ？行き着けでもあるんですか？大好きですけど」

「それじゃ決定」

アンティークのブローチ見ていると伯父がやってきた。

「お待たせ、うなぎでいいかな？入学祝の食事はどこかでちゃんと
やるとして

とりあえずお昼にしよう」

「えー？どうして分かるんですか？」

「そりゃ、何年も同じような行動半径で一緒に行動してりゃそれなりに」

駅近くの店へ入って行く。小さな個室っぽいところへ通されて伯父が注文する

「えつと壘ビール2本エビスで。グラス4つ、先にお茶1つください
う巻2つ、肝焼き4本、お新香2つ、うな重4つ・・・他にリクエス
トは？」

「骨せんべい1つ」

「え・・・グラスは3名様と・・・」

「あ、1つは献杯用だからそこに置いてください」

仲居さんが納得したように私の前へお茶を置いてくれた。

「それじゃ献杯」

お茶がビールのグラスとすっと入れ替わる。未成年の言うことじゃないけど

美味しい。急に気温が上がったし、朝食後水分をとっていないことも影響してるんだろう。しばらくすると、う巻きや肝焼きが出てきた。

卵と鰻のコラボレーション　肝焼きも苦くないし味が凝縮されてる感じ。

追加のビールが運ばれている間は目の前にお茶が置かれている。何となくこの家のルールにも慣れてきたみたい。

ジュース飲みながらうなぎ食べるとかはご遠慮申し上げます。はい。話の中心は高校のことになるのは当然で……

「クラブ活動とか盛んなんですか？」

「都立だしねえ、しょぼいけど一通りあるからオリエンテーション聞いて

から選んだら？何でも好きなのやればいいよ。帰宅部で好きなことやってもいいし」

「伯父さんは何やってたんですか？」

「ん・・今言うと余計な先入観与えるから決めるまで黙ってる。アドバイスできるとすれば・・運動系で中学でもありそうなのはレギュラー取るのは難しいだろうね。3年間のアドバンテージはでないよ」

「私達も黙ってるよ。自分で選ぶのが楽しいだろうし、気を使うこともないから」

「合気道はさすがに無いしねえ・・自分で道場通ってもかまわないよ黒帯だったけ？」

「一応、2段ですけど、このまま続けるか迷ってます。」

「生徒会なんてのもあるけど面倒なだけだし・・お父さんの頃は無かったけど」

「え？クラブの予算とか支給されたんですか？」

「学園紛争のあおりでな。かなり荒れた時期があつてその時に生徒会が無くなった。

俺が入学する3年前に無くなって卒業後2年で復活したらしい。今じゃ考えられない

だろうけど学食も売店も校内に無かつたから塀乗り越えて飯食いにいくのが

日常茶飯事でな。赤坂の街にパチンコ屋が一軒も無い時代で午後から雀荘に入り浸つてそこで飯食つてるもいた。

クラブの部費もみんな持ち寄つてそれで自主運営してたんだわ。

JRじゃなくて国鉄がストやると休校になつて、学校に来た奴らは暇だから弁慶橋や

千鳥が淵でボートに乗つて集団デートといふかなんといふか・・・男女でボートに乗つてる

のは周りの女子高の連中に聞いたら凄く羨ましかったらしいぞ。

赤坂東急のロビーで学ラン脱いだだけで煙草吸つてたら目の前を教師が

横切つたんで停学覚悟したが教師がにやつと笑つて手を挙げて

挨拶してお咎めなしとか・・・今に比べれば無茶苦茶だったけどそれなりに楽しかった。」

「私達するときにはもう校舎も新しくなつてたしね。ごく普通の都立高になつてたよ。

定員割れするんで募集人数も少なくなつてたし、ほのぼのしてて丘の上の別世界って

感じだったかなあ？こじんまりしていて特徴が無いというか、馬鹿さ加減の次元が違う

というか。部活動の費用はちゃんと支給されてたね。」

「お父さんより前の最優秀都立高校、お父さん時代の学校群初期激闘篇時代、私達の
のほん普通の平和維持時代、で、貴美ちゃん達の指定校受験に必死だな時代ってとこ」

「女の子に声かけるのは昔からの伝統？」

「どうかねえ？時代が違うし。俺の頃は通学のバスの中で女子高の子と挨拶して喋った

だけで向こうの学校の話題1日独占できたらしい。

次の日バス中で周りの視線が痛かったりしてな。

慶応女子とか東洋英和とかのさばけた学校じゃないのが回りに多かったせいもあるんだろっね。

でも校内ではごく普通に女の子と喋ってたけどなあ」

「私達の時にはけっこう多かったね。最初の頃は上級生とか校内が多かったけど1年の終わりからは他の学校の子だね。

ひどいのはごめんない言われるために下校待ちしてるしてる男子校の子とかまで。

今にしてみれば可哀想なことをしたと思うよ。後悔はしていないけど。

でもクラスの子とかはごく普通に喋ってたしみんな遊びに行ったり全然平気だったよ。」

ふむふむと聞きながらうな重を食べてるけどこれ本当に美味しい。

香ばしいしうなぎがとろけるような食感、疲れたらうなぎでビタミンAを

補給するのがベストかも

消化に時間がかかるのが欠点だけど落ち着いてお昼食べる機会なんてそんなないし。

「ま、失敗しなきゃいいよ」

伯父の一言でお茶を嘔きそうになって悶絶したのは食後のお話。

この人達ちよつとH

でいーぶ？

彼の手がゆっくりと耳をなぞる。

両手を彼の首に回しじつと上目使いで彼の瞳を覗き込む。

彼の手が顎にかかり上を向けられると彼の唇が目の前に・・・

「あはん・・・」

最初は軽く唇を合わせるつもりだったのに彼に唇を嘗め回される。

唇が性感帯だと気が付いたのはどのくらい前だったんだろう

固く閉じているつもりだったのに彼の舌がそれを割って侵入してくる

「ちゃん・・・」

「うぶっ」

息継ぎをするように離れた唇と唇の間を唾液の透明な糸が繋いでる・

・
また彼が唇を求める。透明な糸で操られるマリオネットを動かす自在師。

今度は容赦なく舌が割り込んで口腔をねぶりながら侵していく。

腰に回された彼の手がすつと動くだけで膝から力が抜けて崩れ落ちそうになる・・・

2人だけしか見えない世界、もう周りなんてどうでもいい

.....

いえね・・・どっか公園の暗がりとかどっかの部屋とか2人の世界演
出する

場所はいくらでもあると思うんですけど。朝8時前の地下鉄車内、
しかも

座ってる私の頭上右斜め上30度、距離2メートルでさっきからそ
の世界が

炸裂してるんです。

周りの通勤客ドン引きしてるし、隣の車輛からどっかの女子高生が
何人も

窓と扉にかぶりついて鑑賞してるんですが。朝から濃厚なディーブ
キスは

お腹一杯なんです・・・しかも女子は私と同じ服着てるし男子は
学ランに

同じ校章付けてるし・・・うげ・・・このバカップル上級生？
そういえば途中の駅でカップルの片割れと思われるどっかの女子高

生が
降りて、発車する地下鉄に手を振ってる先に私と同じ学校のカバン
持ってる

男子がいたなあ。

駅に到着したのでダッシュして地上に向かった。

「おはよう、滝沢さん」

振り向くと同じクラスの男子がいた。

「おはよう、御代田君」

彼も見てみたい。

「あれはちよつと・・・ねえ・・・2人の世界に溺れてるというか・・・朝からつてのは珍しいな」

「うん・・・校内でもああなのかしら。周りは慣れっこになってるのかもう諦めてるのか・・・ね？」

確か彼はイギリスからの帰国だから慣れてるのかしらん

「あそこまで地下鉄の中でやるのはいないよ。下手すりゃ殴られるし」

「だよねえ・・・田舎の学校だと補導とかのレベルかも」

そんな話をしながら一緒に教室に入ると目ざとい男子が声をかけてきた。

「ん？どうした？御代田に付き合えって言われて一緒に登校？」

机に突っ伏して顔だけ左右に振って否定する。

「御代田君に聞いて」

男女何人が集まって彼に質問する

「今来三行」

「半蔵門線内在熱烈男女
彼等上級生為熱烈接吻
我考滝沢嬢当深刻刺激」

「なっ！我要求最後一行修正」

筆箱の中に入つてた定規で彼の頭を軽く叩く

「？呀！我要求極大的刺激！」

「笑樂樂・・呼女王様！　　つて何中国語でコントやらせるんですか
」

「いや〜参つた。駅のホームで同じ学校の学生がデーパーキスして
た」

後から来たクラスメートが同じ話題を話しながら教室に入ってくる。
あれだけ派手に公衆の面前でやればそりゃ目立つよね。

「午前中オリエンテーションと各部活の概略説明、午後から部活の
見学
だつて。5時には全員下校だけど3時過ぎに帰るのはかまわないっ
てさ」

「部活ねえ・・オーケストラはあるけどプラスバンドは無い、ダン
スに
軽音、体育系・・一通り見てみる？」

「後でみんなでお茶しない？下のマックで4時集合・・・各クラス考
えること

一緒かなあ？」

「それだったらコンビニで何か買って教室でどうよ？」

「そのほうが安いかな。それじゃ強制はしないけど16時から適当に
やってるから」

でいーぶ？（後書き）

ちよつと出かけることになったので短いですが投下します。
次の更新は時間がかかるかもしれませんが

部活

親しくなったグループごとに教室を出て行く。文科系でやってみた
いと思う

部活動は無いし、体育系でも中学からやってきたのは無い。
入学式から親しくなった2人と見に行くことにして教室を出た。

「かすみー、何から見る？」

「うーん微妙なのばかり。瑞恵と貴美は？」

プリントを見ながら瑞恵が言う

「音楽、美術系は才能無いからパスかな。オーケストラとか軽音は
ある程度

弾けないと大変そうだし、美術は中学で諦めたしなあ・・・」

私も続けて

「雑草研究とか物理地学はパス。というか興味の対象になりそうなの
が無いね

野球とか男子だけだしサッカー、テニスみたいに走るのやだし。陸
上は論外。かすみは？」

「漫画とかアニメとか・・・あ、オタクってほどでもないけど好きだよ
クラブ活動としては無いしね。出ないで済むのって無いかなあ」

「それ無理っばいよ。うちで言われたけどレギュラーになりたければ

体育系だと中学で部活のありそうなのは避けたほうがいいって。追いつくまでに高校の部活終わるからやめとけて」

「それはあるかも。中学でなさそうなのってダンスと弓道？社交ダンスならやってみたいけどそうじゃないし。時間つぶしに茶道部なんてどう？これから見学でお茶飲めるかもしれない」

「正座苦手なんですけど・・・」

「とりあえず見るだけ」

きゃいきゃいと会話しながらクラブごとの展示を見て廻る。生物研究とか

雑草研究で取り囲まれて勧誘されたり、165超えてる都大会出場経験ありの

かすみが女子バスケットに拉致されそうになったけど振り切って逃げた。うーん怖いところだ。

熱心に勧誘してるのは存続や予算に関係してるんだろうか。でもクラスの子に聞いてる限りでは強制的な囲い込みはしていないみたい。

「貴美はどうするん？」

「んー、バレーバスケットは身長不足。剣道もやったことないしリーチで決定的に不利だもん。水泳は日焼けしそうだからパス卓球やバトミントンは嫌い。走る系も苦手。ダンスは興味ないしできれば個人でできるのがいいかな。」

「後は弓道部かぁ・・・屋上だけ行ってみようよ」

屋上へ上がると見学者が多数。着物と袴に憧れるのは女子比率高いようだ。

射場で弓を引いてる横で着物袴姿で説明してくれてる。後から見たら声をかけられた。

「何人かまとまったら説明しますからちょっと待っててください」

着流しで下駄を履いた男子が静かに言った。前のグループに説明してる女子の声だけが聞こえる。矢が放たれて弦を放れる音と的に吸い込まれたときの音が響く。実際に弓を射るのを間近で見るとのは

初めてなので観察していると耳の後まで弦がきてるんだ・

「お願いしまーす」

声がかかると矢を回収しに着物と袴の男子が的のほうへ歩いていく。

「ということでは説明は以上です。入部希望の方は放課後いつでもかまいませんから」

説明していた女子がこちらを向いて頷いた。そろそろ前のグループが下へ降りていくと

先ほどの男子が説明を始めた。

「えー始めまして。引退した3年生ですが今日は説明役として出ます。

名乗るほどのもんじゃないんで自己紹介は無し」

創部は昭和30年代、入部してからの前（実際的に向かって矢を

射る)までに
3ヶ月程度かかること、道具類はクラブのものを使えるが道着、袴、
矢は自前で
それにかかる費用と合宿、昇段試験の費用は必要なこと、女子でも
男子でも
体格、体力によるハンデは無いし、経験者が入部したことはほとん
ど無いこと、
今練習してるのは2年生でちょうど1年目なことなどを説明してく
れた。

「で、建前はここまで。実際には形から入るから最初で飽きる人が
多いし見ての通り
4人同時に射れる射場しかないから1・2年生で20人以下が望ま
しいんだけどね。
何年前かに部員100名越えたことがあって悲惨なことになったそ
うだ。入部したけりゃ
適当に放課後にきてぐあっ……」

さつき説明していた女子が説明役の頭を叩いてる

「先輩っ！そのやる気の無い説明で私達がどれだけ苦労したか考え
てくださいっ」

「痛えなあ・・んなんやる気のある奴だけ残るのは毎年なんだから
さあ

俺の説明で入部したおまえら、練習量だけはここ10年で最高レベ
ルになつたる？」

「部員の獲得は予算の獲得！今年は備品の入換と屋根のペンキ塗り
があるんですから」

「とうちの主将が申しております。つーことで説明終了です」

へーこの人が主将なんだ。漫画の弓道部員そのもの、美人だけどきつそうな人。

ダッシュして逃げる3年生を2・3歩追いかけて立ち止まり溜息を
ついてこちらを
振り返る。

「あれが去年の主将。いつもあの調子でやる気の無い説明で2年生は幽霊部員含めて10人しかないから入部するチャンスよ。よろしくね。何か質問ある?」

「実際的に向かって射るのには3月くらいかかるのは本当ですか?」

とかすみが聞く

「そうね。そのくらい。飛び道具だし危険な部分もあるから。見れば分かるけど和弓の場合
矢が弓の外側にあるでしょ?落ちたらどうなるか考えてみて」

「えっと。。初歩的な質問ですけど耳の後に弦がきてますが耳に当たったりしないんですか?」

と私も聞いてみる

「ちゃんと骨法・形というか動作ね、とれないと耳とか胸とか二の腕内側とかに当たる

ことがありますよ。弦ってまっすぐ弓に向かって戻るわけじゃない

から耳と二の腕は本来は
当たらないはずんだけど、最初のうちは当たることもある・・・痛
いよ」

この人も脅かしてやる気を減らそうとしてる気がするんだけど。

「そうそう、胸に当たる場合もあるけど、そこは胸当てでガードす
るから大丈夫。」

なんだかなあ・・・お礼を言って下の階へ降りると自販機コーナーの
横でさっきの男子が

コーヒー飲んでる。目礼して通り過ぎようとしたら呼び止められた。

「どう？感想は？まあ彼女がカリカリしてるのも俺がやる気の無い
説明してたのも

訳ありだね。嘘はついてないから許してくれい」

にやっと笑って頭を下げてきた。3年生なのに妙に素直というか・・・

瑞恵が聞く

「訳ありって？」

「彼女からすれば男が欲しい。俺からすれば後輩の試練が面白い」

「はあ？」

笑いながら先輩が付け加える

「ああ、性的な意味で欲しいんじゃないよ。今の2年は幽霊部員除

くと女子4人

男子が2人。団体戦は3人が1組だから2年で1チーム組めないんだ。最低でも

男子4人いないと出場しても総合点できつい。女子は2人でも大丈夫だけどさ。

だから男、男ってわけ。去年は俺が説明してたんだけど男どもに不評でなあ

女子の比率が元々高い部だけど今の2年で残った男子が少ないのよ。主将はいい子だけどちよつといや、かなり性格的にきついんだな。

おまけに責任感

強いから新人が入ってくる時期の運営のプレッシャーで気持ちに余裕が無い。」

「で、先輩はそれを見て面白がってる・・・と」

「半分はそうだね。でも彼女を主将に指名したのは俺だから半分は責任感かな。

ま、入部したければどうぞ。他の部活に比べるとやや経費高め。だけど

精神修養もできる部活はそんなには無いから入部してみる価値はあるよ。

自分に合わないと思ったら3月で辞めれば余計なお金かからないしね。

ところでちょっと手を見せてくれないかな？」

私を見て先輩が言う。何だろ？敵意とか危ない感じもないので黙って掌を差し出した。

「ん・・・ひっくり返して甲も見せて」

触るつもりは無いらしいので黙ったまま見せる。

「ん・何だろうね。剣道柔道でもないし、空手、弓道でもない。歩き方みてるよ」と

何か武道やっていると買ったんだけど。まあ、もしうちに入部したら教えてちょよ。

ほんじゃお疲れ様でした〜」

先輩はそのまますたと階段を降りていった。

歩き方だけで何か武道やっていると師範が言ってたけどやっぱ分かるのかな。ん？でも先輩ってまだ17？18？だよな？そんなこと考えてたら瑞恵が目をきらきらさせて聞いてきた。

「ねーねー！何か武道やってたの？」

「昔ちよつと護身術を習ってたよ」

あまり詳しく話すと面倒だから言葉を濁す。

「へー、部活ってわけには行かないよね」

「うん」

かすみはなにやら咳いてるし・・・

「うーん着流しの先輩！萌えたかも。でも3年生じゃ引退してるしな・・・」

「かすみちゃん・ひよつとして一目惚れ？」

「いやいやいやいや、萌えと惚れは別物なんですよ。これが」

「ふーん」

中庭に出ると茶道部が野点やってる。女子ばかりだと思ってたら男子の見学者もちらほらと。かすみが驚いた顔で指差しながら

「ねえ、あの主人の席でお手前やってる人さっきの弓道部の前主将だよな？」

「え……???」

確かに彼だわ……着流しだったのはこっちでも勧誘するため？あの人って何者？クラスの集合時間が迫っていたのでその場を離れて教室へ戻った。

この学校の生徒もやっぱり変

ちやっと

ちやっとるーむ【丘の上のぷにょ】

代表戸締役 EP2 ZNWYN2

『で、今年の新入生観察も一巡したわけだが』

風雪のルル Ruru < s.xO6

『なんか・・・こう・・・美的資源が集中してね?』

真紅 Sinku < l < vA

『つか、百合はいないのか?腐女子は発見できんのか?』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『エロかわいいのが5組にいるな』

堕天使 ANGELLO・New

『<<真紅 まさか狙ってるん?』

猫鍋 NekoHeta・A

『背が高くてスタイル抜群のほうが好みだにやあ』

代表戸締役 EP2 ZNWYN2

『去年に比べると全体にレベルたかくね?』

風雪のルル Ruru < s.xO6

『3次元でロリ巨乳が存在すると初めて知った16歳の春』

真紅 Sinku < l < vA

『当たり前じゃんw美少女は大好物。脂臭い男共にはやれん』

猫鍋 NekoHeta・A

『あの子達は固いにゃ・・もう何人も玉砕してるにゃあ』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『プ・・もう突撃してるん?』

堕天使 ANGELLO・New

『食べちゃ駄目ゝ私がおねえさんになるんだから』

代表戸締役 EP2ZNYYN2

『おまいら、受験なのに頭の中に色魔飼ってるのか?』

風雪のルル Ruru < s・xO6

『<<戸締り 色の道は別腹だとオモ』

真紅 Sinku < l < vA

『<<堕天使 どうもうちの部に入部しそつだからな。

合宿とか楽しみだつたりしてw』

堕天使 ANGELLO・New

『<<真紅 ふつ・・甘いな・・甘すぎる。今日見学に来て

茶菓子大量に消費してつた。経験者歓迎、こっちは食い物付きだぞ』

猫鍋 NekoHeta・A

『<<春頭 確認しただけでもう10人は確定だにゃ。1年3人2年6人3年1人

まー何人かにアタックしてごめんなさいされた数だろうけどにゃ』

風雪のルル Ruru < s . x O 6

『結局、猫以外は狙いは一緒?』

代表戸締役 EP2 Z N W Y N 2

『俺はどうでもいいけどさ、あのバカップルみたいに目障りなのは勘弁して欲しいだけ。』

あたまは春の都 Graf . E S 7 K g

『1・2年生が必死なのをぬるく観察したいな。』

部活で接触できるのは今のメンバーだと真紅と墮天使だけだろ? 猫鍋んところは2年少ないから6月くらいまで教えるん?』

猫鍋 NekoHeta . A

『にゃ・・・どうするかにゃあ・・・エロかわも捨てがたいがすらつとした美人が好みだし委員長タイプも悪くないにゃが・・・部活は猫の天敵である百合で腐女子の主将がいるからにゃあw』

真紅 Sinku < l < v A

『<<猫 あんたつて人は・・・wいたいけな乙女心を弄ぶと誤解されても』

しょうがないんだからねっ』

墮天使 ANGELO . New

『せんせー!某部の主将が地位を利用してよからぬこと企んでいます』

真紅 Sinku < l < v A

『<<墮天使 オマエガナー』

代表戸締役 EP2ZNWYN2

『フーとここで、例年と同じ議題だが生徒会通さないでフリーの予算分捕るか』

『ついてだが・・・』

猫鍋 NekoHeta・A

『そうそう・・・あの可愛い子だけにゃ、あれ、何か武道やってるにゃよ。』

合気か護身術か薙刀だろうにゃ。空手とか柔道、剣道ではないにゃ。綺麗な魚にゃ毒があるし可愛い薔薇には毒棘があるから気をつけてにゃ・・・
んで猫は寝るにゃ ノシ』

堕天使 ANGELO・New

『マテ、このミツユビナマケモノ!』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『この糞猫があ!』

代表戸締役 EP2ZNWYN2

『ったく・・・猫鍋のHNは伊達じゃねえんだよなあ』

風雪のルル Ruru < s・XO6

『あいつって女好きなのかそうでないのか・・・』

真紅 Sinku < 1 < vA

『むつつりスケべなんでしょうか。あれが主将でよくもまあ部がばらばらにならなかつたのか不思議だわ』

やっぱり変なのばっか

あるばいと

居間と応接間のある机に向かって座りバイト中。

時給1000円だから悪くは無い。問題は充電ホルダーに刺さった携帯とPHSが9台あるってこと。auが私のを入れて4台、ドコモが3台、PHSが2台。鳴ることもあるし鳴らない日もある。要するに電話番号だ。アイフォンは使わないのかと聞いたらつながら無い携帯電話は使えないって。建物の中で圏外になるしすぐ切れるから使ったけどすぐ止めたらしい。

確かに田舎で使ってる人もいなかったなあ。

レポートや論文の校正も時々あるけど医学用語が分かるはずもなくせいぜい誤字脱字のチエツク程度。

後は何してもかまわないらしいから本を
読んだり勉強したりネットで遊んだり。

伯父は一人用のソファでびろろんとのびてるし従姉妹達も
でろろんとべろろんとのびてる。ビール、お茶、ジュース等
飲み物もてんでばらばらでしゃべったり沈黙してたり。

居間にテレビが無いから静かというか何というか。

医者ってストレスの溜まる仕事なんだと実感した。

お風呂入ってたり自分のものを洗濯してたり。

猫が夜の駐車場で集会するのを思い出した。適度な距離をとって
香箱座りしてじっとしてるあれ。

伯父のプライベート用が鳴る。表示された名前は加畑さん??

『はい。代理で出ておりますが滝沢の携帯でございます』

『ん？娘さんですか？お父さん電話に出られますか？』

『あ、先日はありがとございました、貴美です。少々お待ちください』

「加畑さんです」

立ち上がって伯父に携帯を渡す。出たくない相手だと両手で×とかお風呂だとかで逃げるんだけど友達だとそのまま出るみたい。

『おう。この前はありがとねー。うん・・・うん・・・』

私は勉強に戻ったけど予習してる英文和訳が上手くいかない。いつでも聞いて

いいと言われてるんだけど伯父は電話中だしなあ。鎌首を持ち上げた由美さんに聞いてみようつと。

「あ・・・この訳なんですけど、これじゃ変ですよね?」

「ん・・・意味としては通るけど日本語としてはねえ・・・

前置詞+副詞って説明できる?」

「えっと・・・単語としては分かるけど文法の説明はできません」

「ん。そこで引っかけてるのね。前置詞ってのは・・・で副詞が・・・で合わせると・・・」

「そうするとこんな訳になるんですね?」

「そうそう、それで大丈夫。日本語としても読みやすいでしょ?」

「凄いなあ・・・受験から10年経ってるのにちゃんと説明できるな

んて」

「そんなことないよ。お父さんの受け売り。分からなかったら聞いてね」

『うん。分かった、本人に伝えとく。今度飲もうや・・・またな』
電話を切った伯父が携帯を戻しながら続ける。

「この前ヘアモデルやった写真な、明後日発売で掲載されるって。出版社やカメラマンが連絡取りたがってるけどモデル不詳で全部停めてくれてるらしいよ。
ヘアサロンで使ってる髪型見本の写真も大好評で指定が多いらしい。もう少ししたら電話してから来てくれってさ。無料でやってくれるけど写真撮らせろって」

「基本的にはショートボブの変形なのにそんなに指定が多いのが不思議ですよねー。近くで見ると複雑なカットだけど派手ではないのよ」

「そりゃモデルが良いし。ちょっと中年好みのカットだしな。派手じゃないけど」

「しゃれてるってことだろう。あそこの店へやってくる高校生が自分の小遣いで」

「払ってるわけじゃないからスポンサーの意向だね。まあ、あれだ。金もでるけど口も出る・・・」

「柏餅貰ったけど食べる？番茶欲しい人何人？」

由美さんが番茶を煎れてくれた。

「週刊朝目かぁ。何冊か買い込まないとね。ところで部活決まった？」

「まだ決めてないんですよ。弓道部か茶道部か、合気道の道場も3つ見学したけど

何となく情熱傾けられるか自信が無くて」

何となく親子で視線を交わした気がするんですケド・・・

「何でもやりたいものやればいいのよ。弓は未経験だよね？お茶は？」

「裏千家で一通りのことは仕込まれましたから、できなくはないんです」

柏餅を食べながらお茶をいただく。やっぱり餡子は潰し餡が正義。

異論は認めない。それにしてもこの家の人達ってお茶いれるのが上手いんだろ。

紅茶は伯父さん、コーヒーは亜美さん、日本茶は由美さん。

得手不得手はあっても水準以上、得意なのはみんな違うのが面白い。教えてもらって見てもらいながら入れても同じ味にならない不思議悪くないとは言ってくれるけど合格点はまだ貰えない。

「どちらも精神的に落ち着きそうだからいいんじゃない？」

「茶道部の部長も弓道部の主将も女性で茶道は表千家で弓道は未經
験」

「・・・自分で決めるのが良いと思うけどね」

「それよりも周りがみんな勉強できそうなのが心配なんですけど」

「同じ入試問題で受験して入学してるんだから大丈夫だよ。どうせ
6月の

中間テストまで比較できる材料無いんだし。昔と違って授業も50
分単位でしょ？

昔は100分だったから理解できないと大変だったけどさ。その分
細切れで

きつくなったところもありそうだけど。とりあえず予習だけさくつと
やって

授業で分からないところは誰かに聞くことだね。お父さんがベストだ
けど

ざっと教科書見せてもらった限りでは私達でも大丈夫そう。一番良
いのは

お父さんに授業で終わった部分の教科書へ直接書き込んでもらうこと
なんだけど・・・」

「だが家庭科とかは断る。小学校までしか家庭科無かったし公民な
んざ

受けたこともない。どうせ大学受験なんてお勉強というか受験職人
の技術だ。

基礎さえ頭に入れば受験勉強そのものは1年も必要ないよ」

「何だか凄いことをさくつと言ってるような・・・」

「いいかい、模擬試験を受けても経験値なんざ手に入らない。自分の立ち位置が確認できるだけ。」

受験技術は反復練習と学習でしか向上しないよ。逆に言えばそれだけのものではないんだ。物覚えの良し悪しはあるだろうけど

2倍の能力がある秀才でも3倍の時間を突っ込まれるか3倍の効率で学習されたら絶対に負ける。まあそれなりに秀才ってのは勉強するけどね」

「何とかなるから心配しないでいいよ。私達もそうだったし、お父さんの時代はもっと凄かったらしいけどさ」

「別に凄くはなかったよ。3年の夏休み直前まで遊んでていささかやばかったけど」

「女子から手紙貰ったり付き合ったり忙しかったらしいよ」

「無い無い。携帯なんて無い時代だし電話も家にあるダイヤル回す黒電話だもん」

「長電話とかできない。それでも付き合ってたのはいたけどな」

「そつえば、メルアドとか携帯番号聞かれたりした？」

「えっと・・・付き合ってくれと言われてごめんなさいしたのが5人、メルアドや」

「電話番号書いたメモが10枚位、教えてくれと言われた人数は覚えてないですよー」

「女子の何人かだけで番号とアドレス交換したけど」

「ふーん軽く見られたもんだねえ。そのうちに鉄壁女とか呼ばれたりして」

「それもちょっと嫌だなあ・・・」

「でも、考えが短絡的だねーというか、会ってその場で付き合えと言える神経が

よく分からないな。私達の場合は最初はそうでもなかったから少しは中身も見て

くれたんだろっけど、貴美ちゃんは破壊力凄すぎ。今度渋谷とか原宿行ってみよう」

「ファッションとか流行とかあんまり興味ないですから、神保町あたりをゆっくり

歩いてみるのが先ですよ。渋谷とかはそのうちに」

「滝沢家の発祥は神保町だからな。お父さんの住んでいた場所も案内してあげる。

ビルが建ってるだけだけどね」

入部（前書き）

うーん・・・弓道の道具って普通の人には縁が無いでもんね
どこまで描写すればいいんだろっ？

入部

結局、弓道部に入ることにして放課後に道場へ行った。

入部したいと告げたら戸惑うと困るからって練習の最初と最後にする礼のしかたと神棚への二礼二拍一礼の作法から教えてくれた。練習が始まるとこれからのスケジュールをざっと話してくれた。的を射るまで2月はかかること、その前に巻藁に矢を射るまで1月半くらい、それまでは形の練習やゴム弓を使った練習になるそうだ。

練習前に弓保険に加入するので住所氏名を記入してから練習が始まった。

ふむふむ・・・呼吸法は共通してる、両足を真横に揃う形で開いて軽く筋力を張ってリラックスした態勢で動作をするのも共通してるかな。

「しばらく何をやってるのか分からないと思うけど、実際に弓を持ったときに余計な力が入らない姿勢を会得してもらうので地味だけど頑張ってください」

主将が1人ずつ細かい修正をしながら声をかける。二年生も自分の練習を交代でしながら教えてるから忙しそう。教える人数と教わる人数が違いすぎるのかもしれない。

「主将、ちょっと・・・」

この前説明してくれた3年生が主将を離れたところへ呼んで何か話してる。

戻ってくると1年生が集合させられた。

「どつしてこの練習させるかの理由ですけどね、山口君だったっけ、ちよつと前へ出てきて」

体格のいい男子の1年生が前に呼ばれた。

「これ、私が使ってる弓。ちよつと素引きしてみて。弦を離す前まで戻して」

「足踏みから胴造り・・・そうそう・・・」

引き下ろし始めてからぶるぶる震えだした。引ききつて会までできたけど不安定で震えてる。やっぱり無理みたい

「はい、戻していいよ。実際に引くと全然違うでしょ？」

「こんな強い弓を先輩使ってるんですか？とても引けないです」

「実際、男子の使ってるのはこれより強いから。身体を入れると実際に持たないと感覚が掴めないことも多いけど、まったくの初心者だからそれ以前なのよ。そこらを

最初の段階として習得してもらいます。明日から実際に弓を持ったり、ゴム弓で

離れの練習も少し入れますが、何も持たないほうが直すの簡単だからこの練習は

引退まで量はすくなくなってもやる必要のあることです。滝沢さん引いてみる？」

いきなりこちらへ話を振られた。

「やってみます」

足踏み・・胴造り・・構え・・立ち上げ・・引き下ろし・・
同時に同じ力で引き降ろすのって難しい。右手が肩で受け止めてる
のが
よく分かる。

「はあ・・やっぱり無理です」

じっと見ていた主将がちょっと驚いた顔をしていたけどへましたの
かな？。

「弓手（左手）は手の内覚えれば大丈夫、活手（右手）は肩が詰ま
ってるから

そこらへんを直さないかね。それじゃ解散。練習に戻って」

一日目の練習はこうして終わった。

帰りの地下鉄が同じ方向の片野さんと一緒なのが分かって一安心。
喋りながら乗る。彼女のほうが駅で3つ先だから先に地下鉄を降りる
ことになるはずだけどどこかの高校生3人組が声をかけてきた。

「ねーねー、どこの高校？これから遊びに行かない？」

眉毛きれいに揃えてイケメンのつもりなんだろうけどどう見ても
頭悪そうにしか見えないんですケド。当然シカト。

それにしてもよく喋る男達だ。こんなのに付いていく子っているの
かな？

いないから声かけて歩いてるんだらうけど、気が付かないんだらう
な。

どちらかが一人になって付き纏われるのも嫌だから彼女に囁く。

「駅から10分かかるので家に着くし途中交番もあるからうち寄ってお茶しよ」

彼女が頷いたのを確認していつもの駅で降りる。しつこいなあ・・
ぺらぺら喋りながら

まだついてくる。大学に沿って大通りを歩いて次の交差点を左に曲がるんだけど

こっちからは死角になるなる場所に・・あと5メートル・・

「遊びに行こうぜ」

馬鹿丸出しの猫撫で声出しながら人の肩を掴んで引きとめようとした瞬間角を曲がって

「止めてくださいっ」

大声を出した目の前には交番があつてそこで立哨してるお巡りさんの目には女の子を

無理やり引っ張ってる高校生の姿が。同時に高校生の目には女子高生の声で

警戒モードに突入した警察官の姿が・・ダッシュで交番に突入する。

「地下鉄からずっと付き纏われていますっ。今、拉致されそうになりましたっ」

お巡りさんの顔色が変わって

「待たんかい。ゴルア！」

3馬鹿が蜘蛛の子散らすみたいに逃げ出した。一人ポケットから何か落としながら

逃げてつたけど・・・お巡りさんが追跡を諦めて拾いあげる。ん？i phone？

液晶の割れた携帯を机に置いてお巡りさんがこちらを向く。

「大丈夫ですか？」

「ありがとうございます。地下鉄の車内で絡まれて駅からこの交番まで

付き纏われたんで助かりました」

「もし、今後も付き纏われるようだったら相談してください。今回は携帯という証拠があるから取りにきたら説教とききますから」

112

「滝沢貴美と申します携帯番号は・・・で住所は・・・ですので事情聴取が必要でしたらご連絡ください。ありがとうございます。では失礼します」

坂を下りながら家に向かってるけど片野さんは展開が早すぎて固まってる。

「度胸があるというか・・・凄いだー」

「そんなことないよ。交番があるのは知ってたし、何も無くても付き纏われて

困ってますって駆け込むつもりだったんだ。肩掴まれたから叫んだけど

電車の中で分けれるとどつちかに付き纏いそうだからお茶に誘ったの。」

家に着いてドアを開けるとみーちゃんがお迎えに出てきた。にゃあと鳴いて

片野さんを見て小首を傾げる。

「ただいまー」

「失礼します」

「お帰りなさい・・・あら、お友達？」

「帰りに赫々云々・・・」

亜美さんが夕飯の支度しているところへ帰ってきたみたい。

「大変だったのねえ・・・コーヒー、紅茶どっち？お父さんが昨日ザッハトルテ作ったから食べられるよ。片野さん、チョコレートと甘みが強いケーキだけど大丈夫かな？」

「紅茶で。ケーキは何でも食べられます！お父さんが作ったってパテシエなんですか？」

苦笑しながら亜美さんが答える

「違うけど、私は下手なケーキ屋より腕がいいと思ってる。趣味というか・・・何か考えをまとめる時や逆に何も考えたくないときに作るのよね。ある種の精神安定動作・・・かなあ。」

とりあえず食べてみて」

ザッハトルテにお約束の甘さ控えめ生クリームが添えられて出てきた。

うん、美味。濃厚なチョコレートとジャムにクリームが良く合う。

「美味しいですねー、市販のより絶対美味しい！」

片野さんが絶賛してくれた。

「そろそろ失礼しないと・・・門限うるさいんですよ」

「ただいま」

伯父が帰ってきた。

「ん？友達が来てるのかな？いらっしやい」

今日の経緯と門限をかいつまんで話すと

「片野さんの家は西ヶ原あたりになるのかな？よければ車で送りますよ。」

「10分もかからないでしょうし、門限の件も私と貴美が同行してス
トーカー」

「まがいの説明とお礼とご挨拶すれば大丈夫でしょう」

「ありがとうございます。家に電話してから帰らせていただきます」

「もしもし、お母さん？うん・・・帰りに変なのにつき纏われて・・・」

『

「あれ出してくる。すぐ戻るから」

あれ？由美さんのゴルフなら車庫にあっただけどあれって？？

片野さんの電話が終わった頃に伯父が戻ってきた。

「行くよー」

家の前に濃いグリーンの大きなセダンが停まっている。

「これ、俺の車ね。2年で2000キロしか走ってないけど。さ、2人とも

乗って。亜美、夕飯よろしく。30分位で戻るから」

恐ろしくスムーズに走る車だな。伯父の運転もあるんだろうけどまったく興味が無いから分からないけど車が大きいせいかな。

「あのお・・・これジャガーですか？」

片野さんが聞く。聞いたことがある名前だけど何？

「そう。ジャガーですよ」

伯父が答えた

「初めて乗りました。兄に言ったら羨ましがります」

「ジャガーって車の名前？この車東京に来て今日初めて乗ったけど滑るように走るんですねー」

「あのねえ・・・イギリスの高級車だよ。車に興味なくても名前
は知ってるでしょ?」

「名前は知ってても見分けつかないもん」

「別に車の名前なんて興味なければ覚えることもないよ」

彼女の家の前にハザードをつけたまま停車して私と伯父も同行して
玄関で片野さんのお母さんに挨拶する。伯父がかいつまんで出来事を
伝えてお礼をしてくれた。私も頭を下げる。あちらも恐縮していた
けど

玄関先で失礼してきた。

戻りの車の中で片野さんのお母さんと本人の話になるのは当然で・・・

「ところで彼女はクラスメイト?」

「クラスは違いますよ。報告遅れたけど弓道部に入部したんで同期
です」

伯父が一瞬ハンドルを握る手に力を込めたらしく車の挙動が変わっ
た。

「そつか・・・歳の離れた双子の姉でOGがいないか聞かれるかもし
れないけど

正直にいないとだけ答えてね」

「え?姉いないですけど?」

「近くに双子いるでしょ?あれ、部の先輩だし、私もそう」

「えーっ！だから高校の部活何か教えてくれなかったんだ・・・」

「でも、自分で決めることだしその判断に口を挟むのはやるべきでなかったから

黙ってたんだよ。悪い選択ではないと思うけど、現役やOB・OGに余計な

気を使わせることもないから」

家に帰ると伯父が亜美さんに一言

「弓道部だって」

亜美さんは手を叩きながら笑ってる。伯父がかばんから週刊朝目を取り出して

「ここに載ってる。綺麗に撮れてるね、さすがプロというか表情を引き出すのが

上手いわ。」

「いやいやいやいや・・・これ奇跡の写真でしょー、顔が写ってるのは2枚だけど

表情が全然違うから別人にしか見えない。着てる服もミッション系女子高の

制服だから雰囲気違う。テーマが女子高生の制服図鑑だから問題ないか。

「大人向けというか、中高年向け雑誌を高校生が読むとも思えないからバレない

んじゃないですかね？」

「何とも言えないなあ・・・写真と実物を直に比べれば気がつくけど意識してそんなことしないのが普通だわな。悪いことした訳でもないから黙ってれば？」

夕飯の後、電話番しながら昔の部活や今日の付き纏った男子の話になった。

制服の区別がつかないけどどこの学校だったんだろう？同じ電車に乗り合わせる

可能性もあるんだよね・・・考えてもしょうがないか。

外伝・主将（前書き）

外伝として並列進行させることにしました。

散文の書き散らしですから細かいことはええんだよ云々w

外伝：主将

学校の最寄り駅から3駅ほど離れたファミレスの禁煙席、永田町高校の制服を着た男女が机を挟んで座っていた。

「とりあえずドリンクバー2つ、それとミックスサンドと
・・・ 苺パフェ1つ」

男子が女子のほうを見て確認しながら注文する

「アイスティーのレモンだったっけ？」

男子が立ち上がろうとすると

「あ、私やりますから。先輩はアイスコーヒーでしたよね」

素早く女子が立ち上がって取りに行った。その後姿を見ながら男は小さなため息をつきながら小声で呟く

「ん・・・困った」

目の前にグラスが置かれて相手が着席したところで用件を聞く。

「で・・・どうしたん？主将。引継ぎ終わってすぐ以来のデートつか
召還だが。」

「デートじゃありませんからっ。新入生に対する傾向と対策を教え
て欲しい

だけなんですからねっ！」

頬を膨らませて抗議する主将。両手を挙げて低い万歳をして降伏の姿勢を示す先輩。

「はいはい。了解。OBから何か言われたとかあるのかな？」

「それもありますけど、現状一年生12名。もう少し増えるかな、教えるのが2年生6名、

OBは平日あてにできないし、3年生も直接指導は控えてるじゃないですか、今日も自分達の練習ができてないのと指導もできてないんですよ。」

「そりゃそうだ。練習量半分に減らして半分が教えるのに廻っても結局3人しか抽出できないんだから。それが普通だよ。うちらが教えてたときもそんな人数だったろ？」

「3年が日替わりで1人教えてたか・・・3年に出て来い・・・と？」

「是非お願いしたいのですが・・・せめて中間テストの前あたり、一年生が」
「の前に立てるようになるあたりまで」

「分かった。3年生で検討してなるべく期待に答えられるようにする」

「お待ちせしました」

注文した食べ物が来たので主将は苺パフェを食べながら話を続ける。

「で、もう一つ、私が主将を降りたい件なんですが。」

「却下。今の2年でおまえしかできない」

「伊東君でも畑中君でも大丈夫ですから交代をお願いしたいんです」

「本郷主将、俺はよくやっていると見てるよ。OBも3年生も同じ意見だ」

「そろそろ耐えられなくなってきました・・・」

「主将つてのはある部分で孤独だからな。そうでないとできないよ。今の2年生が本郷の言うことを聞かないとかシカトするなら俺から言うがそんなことはありえないはずだけど」

「ええ、ちゃんとやってくれますよ。でも頼れるかとなると話は別だし」

「一年生の指導も自信がないんです・・・平田先輩みたいにちゃんぽらんでも終わってみればしっかり基礎を身に付けさせるなんてとても無理です」

「褒められてるのかいじめられてるのか・・・」

「・・・」

「・・・」

「山本五十六だったかな・・・第二次世界大戦の日本で連合艦隊司令

長官だけどさ・・・

やってみせ 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は
動かじ

てえのがあつてなそれを実践しただけなんだけどなあ・・・
大声とお説教はした記憶が無いんだが

「ああ・・・怒鳴り散らしそつで怖い」

本郷主将が頭を抱え込んで呟く。

「で・・・どうすれば耐えられそつなんだ？」

アイスコーヒーの氷をストローでかき混ぜながら平田先輩が何か覚
悟を決めたように
聞き返す。主将が俯いたまま小さな声で

「先輩は好き嫌いで人をどうこつする人じゃないですよね・・・」

「俺が主将に本郷を指名したことか？好き嫌いじゃないな。人の能
力を考えて

自分なりの結論だつたよ」

「いえ・・・私のことを高く評価してくれてるのは分かってます。私
をどう思つてるか
聞きたいんです」

「ん？そりゃ真つ直ぐ過ぎて要領の悪いところも含めて大好きだが。
属性が百合と腐じゃ

付き合えと言っただけ無駄なのも分かってるつもりだけど。」

主将は俯いたまま耳まで真っ赤になってる

「あの・・・お願いがあります。隣で話してもよろしいでしょうか？」

「かまわないけど、何？」

主将が先輩の右側にべたりと座って囁く

「ちょっとお耳を・・・あの・・・私も先輩が大好きです、付き合っただけませんか？」

「なっ・・・百合で男嫌いじゃないの？俺、腐女子の妄想ネタになること嫌いだし・・・」

「へへへ・・・先輩ならOKだし、傍にいてっただけで嫌なことがあっても絶対耐えられそうですから」

「いくつか確認したいことがあるんで質問してもいい？」

「はい」

「表立って付き合えないのはOK？」

「はい」

「少なくとも来年、俺が卒業するまで公表しないのはOK？」

「はい」

「そっちは現役の主将だし、こっちは受験生で合う時間も回数も限定されるが？」

「はい。理解してます」

「部活の時、知らんぷりできる？」

「はい。今まで通り叩いてかまわないですよね？」

「いつしよに勉強する気ある？」

「はいっ！教えてくださいつ」

「キスしてもいい？」

「は・はいっ」

「……どっかに連れ込むかもしれないけど心の準備はすぐできる？」

「……あの……ちゃんと避妊してくださいませよね？」

耳元で囁かれて真っ赤になったまま固まる主将。

「最後の質問はまだ先だから心配しないでいいよ。こちらこそよろしくね」

テーブルの下で主将の左手を恋人握りでぎゅっと掴みながら囁く先輩。

「あうあう・・・」

見えないところで手足をばたばたさせて喜んでる主将ってふつこの女子高生。

「ちょw、本郷おま、鼻血、鼻血！横になれ」

慌ててティッシュ取り出す先輩

.....

「えへへへ・・・」

呆けたような笑い声を出しながら鼻にティッシュを詰めて上からマスクして主将。

「大丈夫か？」

と言いながら手を繋いで公園の遊歩道を歩いている先輩2人

「そのベンチに座れ。鼻血止まったかな？」

「うへへ・・・大丈夫でふ・・・」

「どうしたんだ？いつもの凜とした氷の女王って雰囲気か吹っ飛んでアイスクリームが完全に溶けたみたいにでるんってなってるけど」

「嬉しかった、物凄く嬉しかった、今でも嬉ひいでふけど」

鼻に詰めたティッシュを外して

「どうせ部活辞めるんなら告って振られて高校も辞めようかと思っ
てたんです」

「ところが俺に付き合えを言われたワケで。」

「先輩はどう考えるか分かりませんが、支えるだけじゃいつか潰れるんですよ。」

支えてもらうことも必要で、ちょうど一杯になってたところに先輩が支えてくれるって

お話をいただけたわけですから。」

「本郷の支えになるかどうか自信は無いよ？サポートがまったく違うところの

可能性も高いし、自分で決断しなきゃならないことが沢山あるからなあ」

「それは良く分かってるつもりですよ。でも、こつやってすりすりできる人が

私を受け入れてくれただけで物凄く嬉しかったんです」

「なあ、本郷・・・さっき、キスしてもいいって言ったよな」

「はい・・・でも、純子って呼んでください」

「純子」

「む・・・」

答えようとした唇をふさがれた。ほんの1秒ほど柔らかい感触が触れて離れた。

無意識だけど目をつぶるのが普通なのかな。

「俺は英樹でいいよ。でも2人だけの時だね。」

あ・・・また先輩の顔が近づいてくる。唇を啄ばむようなキス。摺り合わせたりされて

ぼーっとなったところで唇を割って彼の舌がゆっくりと歯や歯茎を舐めまわしてきた。

顎の力が緩んだところで舌を絡め取られる。夢中になってこちらも侵入してきた

彼の舌を絡め取って反応する。駄目・・・感じちゃって歯止めがかからなくなってきた。

自分が怖くなったので暴れて離れようと思ったけどがちり抱きしめられて動けない。

「むぐううpれうwvbth@rtj@えぶじ」

はあはあ……やっと離れたけどキスって凄い。こんなに高まるものなんだ……

「ふう……危ない危ない……どっかに連れ込みそうになっちまうから今日はここまでかな」

「ですね……でも、ちょっと待ってもらえます？今すぐ立てない……」

5分ほど経ってから立ち上がったところを抱きしめられて軽く唇を重ねられた。

うふっ、今の状態が凄く幸せな主将。

「さ、行くじ」

2人は腕を絡めたまま駅に向かってゆっくりと歩き出した。

外伝：主将（後書き）

R15だとこんなもんでしょうか？

感じ方はひとそれぞれですからねえ・・

お布団の中を濃厚に描写したらアウトでしょうけどどこまでって悩みますわなあ

5 / 6 誤字脱字修正

的前〃射場での的に向かって略式の礼法に沿って矢を射ること

コイバナ

「礼」

主将の言葉で練習が終わった。体力的にはさほど疲れることはないけど

身体の使い方を知らない人にはけっこう堪えるらしい。武道系はジャンルが

違っても共通項が多いみたい。道場の雑巾がけはどこでも同じだけど柔道や

剣道ほど広くないからどうってこともない。2年生の他に3年生が交代で

教えに来てるから密度が濃いというかしっかり基本を教えるというか。

ゴム弓使った離れの練習（弦を離す練習）も始まったけどいつ実際に弓を引ける

んだろうか。家で聞いたら

「教えるのは簡単だけど目立つから6月あたりまで大人しく練習してて」

だって。顔のすぐそばを弦が走って胸をかすめていくんだから考えてみれば

怖いかもしれない。勉強のほうはどうなんだろう？とりあえず授業について

いってるつもりだけど6月の中間テストまで何がどうなってるのか不明。

ちよっと怖いかな。

「ねーねー！ちょっとお茶してかない？」

かすみに声をかけられた。

「うん。瑞恵は？」

「いくー」

結局この2人は私が入部してから3日後に入部してきた。様子が分らないから不安だったらしいけど人身御供の様子見ってどうかと思う。

「お疲れ様でした」

一緒に校門を出た主将や2年生に挨拶して別方向へ

「お疲れ。明日よろしく」

近頃の主将何だか丸くなった気がする。相変わらずやる気の無さそうな先輩を

叩いてるけどひょっとしてぼけと突っ込み？

おしゃべりしながら歩いてると3年の先輩 が追いついてきた。

「おつかれー。少しは慣れたかな？がんばれー」

「お疲れ様です。あのーちょっと教えていただきたいことがあるんですけど」

瑞恵が声をかける

「ん？私でいいのかな？」

「ええ。部活もそうですけど学校行事とかテストとか」

「ああ、その手の話ね。駅の上のマックでいい？コーヒーなら奢るよ」

「いえ、こちらからお願いしてるんですから私達で払います」

「そうもいかないでしょー それじゃ割勘」

飲み物を持って禁煙席に座る

「で、何が知りたいん？」

「えっと・・・テストとか合唱祭とか。とりあえず夏休み前の行事です」

「ん・・・別に特別なことはないよ？赤点もらうこともほとんどないし」

「周りや先輩達がどんなことしてるのか全然見えてこないんです」

「んー勉強してるのはそれなりに、そうでないのもそれなりかなあというか、みんな自分のことを語りたがらないんだよ。弓道部の3年でもどこに進学したいとかどっちの方向へ行きたいとか知らないし」

「そうなんですか？科目とか先生ごとの傾向と対策とかも無し？」

「そうだねー あっても意味無いんじゃないかなー」

「「「???」」」

「1年だとそんなにひねった問題は出てこないし、学校の成績が役に立つとしたら推薦入学かな?ここで上位2割に入って推薦を受けるんだつたらその大学楽勝で入れるんじゃない?」

「先輩はどっち狙ってるんですか?」

「文系だねー できればICUとか行ってみたいけど行けるかどうかは未定だよー」

「私立ですか?」

「国公立だと東大は敷居高いし、地方へ行くのは親が許してくれないしー」

「やっぱり科目が多いのは大変ですか?」

「そりゃそうだよーセンター試験受けるつもりだからやってるけど頭痛いよ」

それから学校行事や慣習の細かいレクチャーをしてくれた。

「弓道部だけどさー 主将が生真面目だから大変だけど頑張ってねーあれでもここんとこ丸くなってるんだから」

「本郷主将ってそんなに生真面目なんですか?ここんとこふつと笑ったり」

してますけど。それに、3年の平田先輩を毎日叩いてますが」

「平田君と本郷ちゃんかー 前の主将が平田君なんだよねーあれはあれで力抜けすぎだったしー あの2人って面白いよー本郷ちゃんが入ってきたとき 主将は平田君でね、いや、彼の教え方が悪かったわけじゃないんだけど やっぱり性格が真逆じゃない、突っ込む本郷ちゃん、糠に釘の平田君でさー どつかれても叩かれても何とも無いんだよねー。で、叩くほうも当たり前前になっちゃったんだ。」

「それが続いて現在に至ると？」

「まー先輩叩いちゃまずいんだけどね、平田君に教わったことあるでしょ？」

後輩相手でも男だったら 君、女だったら さんって呼ぶんだけどさ

『本郷』って呼び捨てにするのは彼女に対してだけだよ。それに本郷ちゃんが

『先輩』って呼ぶのは平田君だけだしー」

「付き合ってるのか？」

女子高生の好物はコイバナです。はい。目を輝かせて先輩に問うかすみ。

「んーどうかねー？ 本郷ちゃんは平田君を尊敬してるのは間違いないけど

いろいろある子だから。平田君はどうなんだろうねー 一番弟子と
思ってるから

あの態度で主将やらせようとしてるんだと思うよ?」

「今までに部内で付き合いってた話はあるんですか?」

瑞恵の食いつきも相当なんですけど・・・

「そうだねー知ってる限りで、聞いた話ではけっこうあったみたい
だよー

先輩後輩で結婚したのも何組があるし、付き合いってたのはその数倍
はある

はずだよね。でも現役のときにはばれたってのは聞いたことがないよ
?」

「隠してるんでしょ?」

「さー?部活でいちやつかれたら非難轟々だろうし今までどうしてた
のかねー?気が付いても見て見ぬふりがベストかなー」

「うちの高校ってかなりお盛んなんですか?朝の地下鉄でキスシ
ーン

見せられたり、やたら付き合いえって言われたりするんですけど・・・

「うんうんと頷くかすみと瑞恵。目の輝きがアップしてるんです。

「付き合いするのは人それぞれだよ?ちょっとかいかけるのが多いのは美
女が

揃ってるからでしょー でも、イケメンってないしそれだけが条件

なのも悲しいよねー。どこか惹かれるとこがないと付き合いたいと思えないでしょー?」

「確かに。クラスでも部活でも同級生だと惹かれる人っていないなあ
あ」

かすみが遠い目で呟く。

「上級生は?」

瑞恵がそれを受けて問いかける

「ん・・・良く知らないし。先輩はどうなんですか?」

「心惹かれる人はいたよ?相手がどう思ってるかは確かめなかったけどー」

「え?まだその人って学校にいます?」

「それは ひ・み・つ そろそろ遅くなるからお開きにしよつよ。」

先輩の一声でその場はお開きになった。

.....

「ただいまー」

「おかえりー 夕飯30分以上かかるから先にお風呂入ったら？」

「はい」

家に帰ってきたら珍しく全員揃って夕食になりそうだった。

足元にすりすりしてきたみーちゃんの頭を軽く撫でて部屋に戻って部屋着に着替える。着替えの下着だけ持ってお風呂タイム。

いくら武道をやったといっても使う筋肉が違うのは事実でやっぱり疲れるのは事実だし。ゆっくり髪を洗って乾かしたりしていると30分なんて

あっという間。段々身づくろいに時間がかかるようになってるのが怖いけど

どうしてかなあ？ドライヤーを使う時間も圧倒的に短くなってるのに。

キッチンに行って配膳だけでも手伝う。やっぱり居候だもんな。

夕飯のおかずは鳥南蛮にサラダと野菜の煮物、お刺身少々。

猫神みーちゃんは先にお刺身食べて毛繕いの真っ最中。

「ビール飲む？」

「いただきます」

伯父が缶のエビスを開けてグラスに注いでくれる。

「お疲れ様〜」

グラスを持ち上げて乾杯の仕草だけ

ごきゅごきゅごきゅ・・・ぷはーっ美味しい。

風呂上りのビールって最高だけどオヤジ化した自覚のある女子高生
ってどうよ？

まあそれを言い出したらショートパンツ穿いて椅子の上で胡坐をか
いてる双子の

女医さんも同じようなもんか。それにしても350CC入るグラス
のビールを一気に飲める

のは凄いな。まだまだ真似できそうもない。鳥南蛮をぱくつきなが
らビールを飲んで

あれやこれやしやべりだす。話の中身はごく普通の生活や出来事だ
ったりさっぱり

分からない医学用語が飛び交ったり色々。日によって違うけど、仕
事の話はなるべく

避けてるような気がしなくも無い。

そっだ、今日の話聞いてみよう。一応弓道部のOB、OGなんだし。

「永田町高校の弓道部で部員同士が結婚したのって何組くらいある
んですか？」

伯父が考えながら答えてくれた。

「5年先輩と3年先輩がくつついたのと俺の1年先輩と2年後輩、
それに2年後輩同士が
結婚したな。知ってるのはその3組かな」

従姉妹達が続ける

「私達が知ってるのはその後で8組かな。卒業して4年後からは知らないけど、
けっこうあるんだよね」

名簿見て旧姓追ったところで突合せは難しいかあ」

「各代10人として50年で500人、20人で1000人だから
10組として伴侶を見つけたのが
2%になるか・・・多いのか少ないのか何ともだわな」

「どこでぶつかるか分からないんだから確率としては高いと考える
べきなんでしょうか？」

「むしろ高校時代付き合った相手とそのまま結婚するのが幸せなの
かどうかってことだろうね」

ご飯を軽く済ませて電話番しながら復習始めた。伯父が近くに来て

「分からなけりゃ見るけど、どうだ？」

「ちよっと酔いが醒めるまで軽く流そうかと」

「高校生の日常やる勉強だよな？酔っ払ってやると誰かが危ないとか
周りに迷惑がかかるとか一生後悔するとか無いから流さなくて大丈夫
だよ。」

間違ったらやり直せば良いだけなんだから。」

「それもそうですね。ちゃんと集中してやります」

「そうそう。高1の内容なんぞ酔っててもできないと」

ナンダカトンデモナイコトイッテルキガスルンデスケド・・・

外伝：主将2

ちやつとるーむ【丘の上のぷによ@体育館裏】

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『つたくもう・新入生争奪戦は弓道部の一人勝ちじゃねーか』

代表戸締役 EP2ZNWYN2

『予算もかなり持ってたよな』

風雪のルル Ruru < s・XO6

『部員数だけならともかく美形を独占したのが許せん』

墮天使 ANGELLO・New

『<<真紅！おめーやり杉！美的資源根こそぎ』

真紅 Sinku < l < vA

『うふっ うふふふっ そうおっしやられても・・・w』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『<<墮天使 まあまあ・・・3年ぶりに男子が入部したんだろ？それも3人』

代表戸締役 EP2ZNWYN2

『新入部員だけで40人だと？少しこっちにも回してクレクレ』

墮天使 ANGELLO・New

『<<春の都　うるさいうるさいうるさい！部員は喜んでるけど私は不満だわ』

百合の園を作ろうと思ってたのに！』

真紅　Sinku < l < v A

『頭割りの予算ゲットできたから少し舂るつもり。例年だと7割いなくなるから』

期待してね（はあと）』

風雪のルル　Ruru < s · x O 6

『いいなあ・・美女をはべらせて百合のハーレムと腐の妄想が楽しめるんだから』

猫鍋　NekoHeta · A

？甘い言葉で巧みに誘う

？ちよつとだけなら大丈夫だろうとつい入部する

？ほら大丈夫でしょ？更に甘くささやく

？これなら友人にも紹介しなくちゃだわ

？ほら大丈夫でしょ？他にこんなのもありますよ

？まあ素敵それもみんなに紹介しなくっちゃだわ

？もつと集めたら軽く縛ってみよう

？ああ何て楽で居心地がいいのかしら

？そろそろ行くか・・・

？ぎゃあああああー

今二二

毎年繰り返されるよくある話でございましてにやあ・・・

（・・）ニヤニヤ

あたまは春の都　Graf · ES7Kg

『<<真紅　予算が付いてこない新入生なんざ意味ないやん』

墮天使 ANGELO・New

『<<猫 マテ?は何なの??は?やつぱり変態?
<<真紅 あんたも縛られたことあるの?』

風雪のルル Ruru < s・xO6

『猫ならありえるなw』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『やつぱり・・・w』

代表戸締役 EP2ZNWYN2

『確かこの前読んでた文庫本は団鬼六だったなw』

.....

ここだけメツセンジャー

純々

『先輩まさかそんな趣味ないですよ・・・ね?』

英々

『ねーよw 純子は9割以上ドS女王様モードだろっし。
ちよっと受け狙ってみるかwww』

.....

猫鍋 NekoHeta・A

『縛りは苦手にゃ。やっぱり鞭と蠟燭でだな・・・w』

堕天使 ANGELON・New

『さ、サディスト?』

真紅 Sinku < l < vA

『ロウソク・・・ロへ) (ノ) ピシ!』

ほーっほっほっ 女王様とお言い! って・・・猫ってそうだったんだ・・・』

猫鍋 NekoHeta・A

『大体だにゃ、うちの主将はドSだからにゃ』

代表戸締役 EP2zNwYyN2

『ごつですね、よくわかります』

女王様とお呼び、オホホホ 川^。^) / シッ! ; Q (アン! イイツ』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『猫がDM?』

風雪のルル Ruru < s・xO6

『真紅のドSは理解できなくもないが、猫がMとは・・・人は見かけによらないなw』

猫鍋 NekoHeta.A

『あぶのーまるな性癖は無いにゃあ・・・痛い嫌いだし』

堕天使 ANGELLO.New

『普通だと妄想と萌えは別腹でしょーjk そうでなきゃ犯罪の巣窟になつてる』

代表戸締役 EP2ZNWYYN2

『ところで主将、部長の顔合わせミーティングが日曜日にあるが全員参加だよね？』

真紅 Sinku < l < vA

『<<戸締 私は欠席。朝からちよつと出かけるんで』

あたまは春の都 Graf.ES7Kg

『猫と俺は関係ないし』

堕天使 ANGELLO.New

『私は出るよ。』

風雪のルル Ruru < s.XO6

『俺も出席。戸締りもだな』

代表戸締役 EP2ZNWYYN2

『出るよ。次の議題だがここんとこ真紅が嬉しそうな件。』

風雪のルル Ruru < s.XO6

『言われてみれば……w何かあったのか?』

墮天使 ANGELO・New

『確かに……男でもできたか?』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『笑わない女王様が近頃笑ってるのは確かだ。
きりきり吐きませーい』

猫鍋 NekoHeta・A

『やっぱり笑顔がいいのは確かだにゃw』

真紅 Sinku < l < vA

『<<ALL 別に何も無いけど……?新人の勧誘が上手く行った
のと

運営が軌道に乗ったからかな?』

墮天使 ANGELO・New

『脳内が夢見る乙女状態になった理由は?今度小一時間問い詰める
から覚悟しとき』

.....

ここもメッセンジャー

純々

『いやああああああ笑顔がいいなんて!でもバレた?』

英々

『ありていに言えばきれいになってると思うよ？シンデレレのデレが
滲み出てきてるからw可愛いのは元々だけどさ、魅力がアップしてる
バテてはいないけど気をつけないと』

純々

『きゃああああああ111!!!!顔真っ赤になった！
バレないようにばっくれないと』

英々

『がながれw そろそろお風呂とかで落ちない？少し電話で話した
い。』

純々

『はいっ！　そうします』

.....

真紅　Sinku < l < vA

『<<墮天使　問い詰められても話すようなこと無いんだけどなあ』

墮天使　ANGELON・New

『ここ1週間、フェロモン撒き散らしたと自覚無いん？』

真紅　Sinku < l < vA

『そつ？年齢による普通の成長だとオモ。』

猫鍋 NekoHeta・A

『そろそろ寝るにゃあ・・・』

あたまは春の都 Graf・ES7Kg

『俺もそろそろ落ちる。もう少し勉強しないとな』

風雪のルル Ruru < s・XO6

『さつさと寝る。おやすみ ノシ』

堕天使 ANGELLO・New

『<<真紅 今度じっくりお話したいわぁ W 私もお風呂タイムだ
わ』

代表戸締役 EP2ZNWYYN2

『で、お開きだな。おやすみなさい』

真紅 Sinku < l < vA

『ではでは』

『もしもし、お疲れ様』

『お疲れ様でした。私ってそんなに変わりました？みんなに言われるんですけど』

『大多数がそう言うんだから変わったんだろうね。俺が見てもきれいになったというか色気が出てきたというか』

『きれいになったって・・・今のところバレてはいないようですが、気をつけないとですよ？』

『うん。学校では校舎も違うし部活の中で週2回しか顔を合わせないから問題ないはずだよ』

『登校時間もずれてるし経路も違うし・・・偶然すれ違ってても普通の挨拶は部活知ってる人なら当たり前すぎて完全スルーがデフォになってますね。』

『昨日すれ違ったときもごく普通で表情消してたから気が付くのはいない・・・はず』

『茶道部のお茶会には参加するんですよね？部長に突っ込まれる可能性はどうでしょう？』

『大丈夫だと思うよ。純子の相手が誰か分からないからみんな注目してるわけで。俺が』

そつだとは気が付いてない。聞かれても知らないで逃げるし』

『日曜日朝から一緒に出かけるのはどこへ行くんですか？』

『ん？デートだよ。行き先は・とりあえず水族館からどっか邪魔の入らない静かなところ』

『あ・・付き合ってるからデートかあ。考えてみれば今までプライベートなお付き合いいつて無かつたんですもんね』

『場所が確保できたら少し勉強見てあげられるから1、2教科用意しといて』

『お弁当とか用意します？』

『雨だと食べる場所の確保が問題になるからどっかで食べよう。高いのは駄目だけど奢るよ』

『小学校の遠足みたいに前日眠れなかったりして。楽しみにしてます』

『つてことで日曜日に。そろそろ風呂入ってくるよ。』

『はい おやすみなさい』

『おやすみー』

閑話休題（前書き）

画像なんてのを貼ってみるテスト

閑話休題

5 <

> i 7 4 0 3
| 1 1 7

貴美です。

これでちゃんと表示されるのかなあ？

ちょっと美人にしすぎたのかそうでないのか・

自画像って難しいかも。

え？私の恋愛話が全然出てこないって？

あなた、踏まれたいの？

元々作者が女子高生の恋愛物を書くなんて一つも

意思表示してないしい。

15禁指定はお布団の中だけじゃないからなのよ。

お布団の中の人はしばらく主将にやってもらおうかな。

露骨なことは書けないし、でも直接描写するよりもっと濃厚な

訴えかけをする淫靡な表現もあるから。

でもね、考えてみれば伯父の恋愛話とか従姉妹のとかだと

ベッドシーンじゃなくてもっと微妙な表現になるのよねえ……

何々？袴の下はどうなってるのか詳細に描写しろって？

踏む……絶対に踏んでやるからっ！！

閑話休題（後書き）

つーことで、感想その他展開等、ありましたら誤字脱字も含めてお知らせいただけるとそちらへ話を振るかもしれません

練習

部活の練習にも力が入ってきた夏服に衣替えしたある日、というか単純な練習に飽きてきた今日この頃。もう何人か退部してるんですけど。。。

授業もけっこう忙しいしついていくのも大変だけど、それ以上に部活も

大変だ。中間テストがあるし傾向と対策があるような無いような曖昧さ

が蔓延してる。クラスでのおしゃべりや、部活の同級生、それ以外の友人との会話はものすごく楽しいけど、一番肝心な勉強が不安なのは困った

もんで。伯父や従姉妹は口を揃えて心配ないと言っけど実際にテスト受けるのは私だし。授業の中身を理解してないとは思わないけど本当に

これで大丈夫なのかな？

道場の隅っこで2年生と3年生、それにOBがごしよごしよ話してる

「そろそろどうですか？」

と主将

「それって主将判断だよ？反対する理由はない」

「個人的にはいいと思いますよ」

「前に飛ばばめっけもんだから段取しないと」

「弓道部名物、道場裏開設？ ワクテカ」

「それじゃ費用意して。全員は無理だけど何人かはいけるでしょ」

「1年生集合」 伊藤君、沢田君、滝沢さん、片野さん。

巻藁で実射に行きます。ゆがけの付け方教えますから新井先輩のとこへ集合

他の1年生は村石君と一緒に畳と段ボール用意して。段取は彼に聞いてください」

ゆがけの準備は分かるけど畳の用意??何だろ??どこからか畳が10枚ほど出てきて
巻藁の向こう側と下側、それに壁側に立てたり敷き詰められた。解放された側には段ボールが2重に立てかけてある。

「それじゃー説明するね。今まではゴム弓で練習してたから指の先端でゴムを引っ掛けて
離れの練習してたんだけど、実際に矢を弦につがえて射るときにはゆがけ使います。」

実際にゆがけを見せながら説明がある。

「見れば分かるけど弦を親指の根元にある溝に引っ掛かった状態で引いてるのよねー」

ゴム弓との最大の相違点がここ。試験には出ないけどしっかり覚えておいてね」

ゆがけの装着方法と紐の処理、それと矢のつがえ方。確かに矢を落さないだけでも

注意することが多いのは教わったけど実際に引き込むのは初めてだから緊張する。

「それから畳と段ボールだけだね、目の前1メートル未満で直径60?の巻藁外すとは

思っでないでしょ?外すんだなー・これが」

先輩、脅かしてるんでしょ?ね?ね?

「誰か言っでたけど前に飛んだらめっけもんと思っでればいいよ。

最初の10射は本人と指導する一人以外は全員退避するから」

「えーっ!そんなに危ないんですか?」

「慎重すぎるっでことはないからねー、大丈夫、落ち着いてやれば平気だよー」

2年生だっで一年前は同じことやってたんだしー私達3年だっで2年前は同じだっでたよ?」

「弓道部名物道場裏四畳半畳の下貼り、始まり始まり〜ぱちぱちぱち」

2年生も妙にテンション高いんですケド・・・

「新井さん、おねーさんちよつとちよつと」

平田先輩が新井先輩を手まねきして呼んでる。

「あーたね・・誕生日が2日遅いからって人をおねーさん呼ばわりしないのっ」

空手チョップが水平打ちと見せかけて垂直に頭のとっぺんにきれいに決まった。

うーん元主将でいじめられ役？本当に良く分からない人だ。

「つつたくもう・・2代続けて叩かれるって何かの呪いかねえ・・ごによごによ」

「そつかそつか・忘れてた。あんたが指示するわけにもいかないもんねー、さんきゅー！」

慌てて新井先輩が道場に戻って胸当てを持ってきた。

「女子は制服のベスト着用してねーその上からこれつけてねー胸が大きくても当たらない人は当たらない。平坦でも当たる人は当たる。」

「ださい制服でも脇にファスナー付いてると便利なのよなー耳に当たるかどうかは・・最初は運次第かな？うふふっ」

先輩、何だか黒いんですが・・

「伊藤君だったかな？これ付けて」

平田先輩が手首から肘の手前まであるサポーターを彼に渡した。

「あー他の人はいらぬから。伊藤君専用だ」

「なるほどねーそつちはその準備かーいろいろあるよねー」

三年生は顔を見合わせて頷きあつてるし、二年生は不気味な微笑を浮かべてるし。

「それじゃ4人集合。左手でじゃんけんして、勝った人から並んでちよ」

じゃんけん・負けた。最後だ。最初は伊藤君。顔が強張って緊張しまくり。

歩く姿はロボコップですねえ。彼を中心にして彼の前にいる主将を除き全員

10メートル離れる。正確には前方は畳で保護した壁、横方向は段ボール

後方10メートルにワクテカしてる2・3年生とどうなるか興味深々の1年生。

「みんな、見てて。落ち着いていままでやってきたことと同じことをすれば

いいだけの話なんだけどさ、弓を射るのがこんなに難しいと感じる瞬間かもしれないよ」

「まーねー初体験だし」

先輩ちよつと意味が違つような・なんでもありません。

伊藤君がゆっくり動作に入るちゃんと引ききつて・離したけど弓

が大きく揺れた。

主将が笑いながら矢の抜き方を教えてこちらを振り向き指を3本立てた。

弓手（左手）の使い方を説明しながら2射、3射と続けて終了。戻ってきた伊藤君
汗びっしょりの額を乱暴にタオルで拭う。

「痺れた・・・弓を射るってこんなに難しいって再認識したよ。二の腕も打ったし」

左腕のサポーターを外すとつつすらと赤くなってる。

「本郷が説明してたと思うけど弓手の使い方がなってない。弓を支える点がどこか
考えながら巻藁に向かって欠点矯正だな」

平田先輩が弓を持ちながら欠点を指摘してる。2人目は片野さん。

1、2射目は無事だった

けど3射目で矢を弓手から落としてやり直し。4射目で巻藁外して
畳に矢が刺さった。

虚ろな目のまま戻ってきて一言

「外した・・・こんなに難しいんだ・・・」

「お疲れ。活手（左手）の肘の使い方研究しようねー手首使って矢
を押し付けてると

引いている途中で力が抜けて矢が落ちるから。口や唇で載せて動作
続けることもできるけど

「一番上手いというかやった主将が後で説明してくれるよー」

3人目は沢田君。動作とか問題ない……のかな？それにしても最後に動揺してるし、主将が耳元覗き込んでるけど……ん？指2本立てたけど笑い顔ではないな。

2射、3射で終了して戻ってきた。

「耳が・・耳に弦が当たって痛い」

耳を見ると先のほうが赤くなってる。次は私なんだけど不安になるなあ

主将の前に立って一礼。

「お願いします」

「大丈夫。慌てないでいいから。矢を番えるのも初めてなんだから上手くできなくて

当たり前。緊張するなは無理な話だから落ち着いてね」

やっぱり緊張してる。練習でやってきたことが頭から飛んで体がばらばらに動いてるのが分かる。

「何も考えなくていいから、体を前後に伸ばして矢を離すイメージだけでそう・・
そのまま・・ぼんつと」

ゴム弓とはまったく違う感覚。耳の横を矢と弦が弓の力で走っていた。怖くは無いけどものすごい緊張感と集中力が必要なんだ。

「うん。最初はそんなもんでしょ。4人の中では一番落ち着いてた。続いて5射」

矢の抜き方を教えてもらい、続けて練習。極度の緊張感は無くなっただけ、物凄く疲れる

「何も考えないで引けるようになるといいんだけどね。お疲れ様」

相変わらずちよつとつんとした雰囲気初めての巻藁射が終わった。

「最初の組の4人、10分くらい借りるよ」

平田先輩が2年生に声かけて4人を引き連れて自販機コーナーへつれ出した。

千円札を自販機に突っ込んでアイスコーヒーのボタンを押す。

「好きなの押して。おごりだから」

「「「「はい」」」」

4人が飲み物を手に取ったのを確認して

「お疲れ様、初巻藁終了を祝って乾杯。時間もそんなにないから感想だけ聞かせて」

「緊張しまくりました」

「精神的にタフでないとできないんでしょうか?」

「分からないことがどんどん増えていくんですけど」

「練習量はもつと増えるんですよね？大変かも」

ひとしきり感想や疑問が並んだところで先輩が口を開いた。

「まあ練習量＝慣れなんだよね。2週間程度で実際に的に向かって射るし

夏休み前までに最低でも1日10射できればいいんだけど。人数が多いから

大変だよ。引いたもん勝ちってところもあるし、武道だから向き不向きが

はつきり出るから入部した目的が分からなくなって退部するのも多い。

でもそれでいいんじゃない？わからない事は悪い事じゃない。はじめから出来る奴なんているわけないし。

分からなければ分かるように努力し、知らないならば知ればよい。分からない事を侮る奴がいれば、それは愚かなんじゃないかな？

別のことがしたくなるのが分かったらそれだけで進歩だと思っよ。ってところでまた主将に怒られるから休憩終了ね」

うーん奥が深いな。続けてみよう。週一で合気道の道場にも通う予定だけど

どんどんハードな体育会系に漬かって行くなあ

練習（後書き）

お仕事、かなり悲惨になっています。
デスマーチ真つ最中で更新時期不明ですわ。

お勉強（前書き）

入稿間に合ったらしい・・・w

お勉強

> i 9 1 0 8 — 1 1 7 5 <

「つーことで中間テストですよ。1週間前から部活は休止ね。道場は空いてるから練習するもよし、勉強したければ教えてもらえるかもしれない」

主将が宣言して2年生が一斉に3年生に向かって呪文を唱えだした。

「アツラーアクバル!」「オーブイエクト!」

あおう・・・ここはイスラム圏なんでしょうか？

1年生は頭に????で見てるだけ。

「ここんとこ先生方も賢くなってね、山を張るのは不可能に近いんだけどさ。」

それでも書き込んだ教科書とノート、教えてくれる先輩がいるってのは有り難いんだな」

「え？勉強会やるんですか？」

「あくまでも自主練習だよ。的も出すけど引きたい人は弓引いて勉強してもらいたいのは

そこのミカン箱やちゃぶ台引っ張り出してやるっと。参加しなく

ても問題無いから。
役に立つかどうかは自分で判断してね」

んー良く分からない部活だ。瑞恵もかすみも何をしたらいいのか良く分からないのは一緒
みたいだから参加してみよう。

翌日の放課後、道場に行くと7割の面積に机と座布団が置いてあった。それにしてもこの前の
畳といい今回の長い座机や座布団ってどこにしまいこんであるんだ
ろう？

主将が来て進め方について教えてくれる。

「基本的には学年ごと3、4人で分からない問題があったらそれを出して分かる人が回答と
それに到るプロセスを説明するってところだね。上手く行かなければ先輩に聞いてみて。
理数系だと平田先輩、文系だと新井先輩がお奨めかな？今の3年生は優秀だから1年生の
問題なら誰でも問題なく答えられると思うけど・・・教え方のお勧め。最初は平田先輩に
ついてもらいなさい」

「それじゃ数学から。この手の問題が良く分からないんですけど」
かすみは数学の問題を拡げる。先輩はちらっと眺めて隣の机で古文の解説を始めた。

「えっと・・・答えが1になるのは分かるけど説明が・・・」

瑞恵が呟く。

「滝沢さんは説明できる？やってみて」

先輩が振り返って指示をしてくる。

「えっと・・・これがこうなって、垂線をここに引いて・・・でこうなって答えが1でいいんですか？」

「ん・・・間違いではないし正解なんだけどさ、細川さん、今の説明聞いても理解できてないでしょ？」

先輩がかすみに向かって目を細めて聞く

「え？ええ。でも、どうして分からないって分かったんですか？」

「中学で習ったこと忘れてるんだよ。この公式覚えてるでしょ？」
「それがこうなって・・・」

こうしてああして、あとは細川さんの説明で分かったかな？」

凄い・・・分かりやすくすつきり収めて読みやすく説明しやすく突っ込まれないように

答えを出してる。伯父さんと一緒に思考回路？

「はいっ！良く分かりました。こうすればいいのぉかぁ」

「まあ、分からないのは分かるようにすればいいんだけどさ、答えが出せるだけだといつか躓くし」

自分だけで理解して説明してるつもりでも人に分からない説明だと無理がある。人に説明して理解してもらえるようになれば応用も利くから。得意な科目だったら自分から説明してみるのもいいかもしれないね。進め方分かった？後90分しかないから30分ずつ時間割り振ってやってみて。

他の1年生と科目を摺り合わせると効果的だよ。続けると飽きるし」

「先輩！ちよっとお願ひします」

主将がやってきて自分の島へ引つ張って物理の問題を押し付ける。先輩はやれやれといった顔で問題に視線を落した。新井先輩は的に向かって

自分の世界に没頭してるし。力の抜けた姿なのに凜としてるんだよなあ・・・

ちよっとなげる。

お勉強（後書き）

挿絵は主将のつもりで書いたんですけどね。ええ。

彼女のキャラもねえ・・・難しいというか

Hいシーンの挿絵は簡単に書けるんですが。困ったもんだ。

お勉強2

あつというまに試験の前日になった。

「何となく飲み込めたかな？ 要は人に説明できるようにするのが目的なんだなー」

新井先輩がお茶をすすりながら話しかけてきた。

「それは分かりますが説明できることと実際の成績の関係が不明なんですけど」

男子の1年生がお茶を煎れながら聞いている。どっから出てきたのか不明だけど

ガスボンベで使えるガスコンロとヤカン、大きな土瓶、湯呑が1ダース。

おまけにお煎餅の大袋と柿の種が入った四角いブリキの缶。新井先輩が煎餅を齧りながら続ける。

「どのくらい前から続いているのかは不明なんだけどねー、私の知ってるOBで

10代前の人に聞いたら当時からやってて起源は不明だって。やってみて分かるのは

一人で勉強していると気が付かない穴を塞げるのと理解していないと人に説明できない
ってことだと思っよ」

「確かに分かっているつもりだったけど人に説明するのって難しいで

すよね。

やってみて聞き手がどこが分かってないのか感じ取って詳しく説明するの

は・・・」

「新井先輩も平田先輩も凄いです・他の問題の説明しながら

こちらの話聞いているだけで問題だけじゃなくて個人の欠点まで指摘するなんて」

「私は駄目だよー指摘はできてもちやんと説明するのは苦手だし、どこが理解できてないか把握できないから。平田君は・凄いや。天才じゃないのは2年以上一緒の部活やってよく分かってるけどさ、お勉強の才能は無い・はずだけど欠点を埋めると状況判断の才能はもの凄いから。」

「何やら俺が話題の中心なん？実は1、2年生の問題見て自分の欠点探すのが

目的でもあったりするんだけどね。」

湯呑を手に取り、左手を柿の種に突っ込みながら平田先輩が新井先輩の隣に座った。

「確かにそうだねー、自分で自分を評価するって難しいから、ちょこちょこ振り返って見てるけど中々ねー」

「そろそろ仕舞いますから。お茶道具洗ってきて。収める場所は天袋の脇ね。」

机は道場の壁の中・誰が作ったんだか知らないけど先輩の遺産。鍋、食器、炊飯器まであるけど、使い方と使う時はその時に説明し

ます。

練習じゃないから終礼は無し。試験明けから袴着て練習してもらいます

みんな試験頑張りましょう」

主将の指示ではたばたと道場を閉めて下校した。

試験の成績？悪くなかったですよ？順位とか未公開で平均点も不明だけどw

夏休み（前書き）

夏休みって何？それって美味しいの？？

夏休み

夏の強烈な日差しの中、坂を這い登って登校するのはしんどい。冷房の効いていない更衣室で着替えるのはもつと辛い・・・

更衣室で道着に着替えるとき、ジャージに着替えるのと違うのは最初に

足袋を履くことかな。くるくるつと道着に着替えて帯を締めて袴を着ければ準備完了。ん？簡単に書きすぎだと？

下着はそのままでも平気だし、キャミやＴシャツは身に付けても付けなくても構わないって言われた。

実際には道着の下に汗取り用Vネックのノースリーブシャツとスパッツを着てる。道着だけだと透けるからエチケツトみたいなん。

最初は2年生総出で着付けとか着かたを教えてくれたけど、合宿までに着崩れない着付けができるようになっていないと話にならないらしい。

ちよつと、その貴方、そう、この文章読んでる鼻の下が伸びてる貴方ですよつ。

女子の袴姿に何かとんでもない妄想してない？妄想を撃砕くようですよ、

ちゃんと下着着てます。それに馬乗り袴だから転んでも何しても下着は見えないし、

着物だからって道着着てるから脇の下もガードされていますから。

袴の脇から手をつ込んでぼりぼり搔いても横から見えないという

凶悪な

防御力を持つているから血走った目で期待を込めた視線を送らないようにね。

私は何年間か着ていたからざっくり着れるけど生まれて初めて着る人にとつては

大変みたい。きちんと帯が締められなくて女子だと着付けが下がって、

男子だとずり上がるのはお約束。

帯の結び方もざっと思いつくだけで6種類あるし。いつも使うのは片ばさみか横一文字時々一文字かな。

「たつきー、手伝って!」

かすみが袴の紐で手間取ってる。帯の締め方がきつ過ぎるのと後下がりで

着付けると後で緩むのよねえ

「しょうがないなあ・・・帯、締めすぎだよ? 苦しいでしょ。」

ほどいてから締め直さないとどうしようもない。

和服を初めて着る人が帯をきつく締めれば着崩れないという固定概念に囚われてる。

「このくらいで十分。そうしないと道着を整えるのもできないしゆったり呼吸できないでしょ?。」

前が下がるような締め方にしないと後で解けるんだよ。

今度着付けの特訓だね。30回も着たり脱いだりすれば体で覚えるよ」

「いいなー 袴着慣れてるのって。今度特訓手伝ってくれる？」

「やろうやろう！うちでもいいし。ついでに浴衣の着付けも！
どっかエアコンの効いてるところでやろう！」

「浴衣かぁ・・・従姉妹から借りるかな・・・買ってもそんなに着ないし」

「たつきー、普通に着付けできるの？」

「さすがに振袖は無理があるけど普段着ならできるよ。
冬になったらみんな着物に袴でしょ？」

着付けできるようにならないとマズーじゃない？」

「確かに・・・でも着物って高いよねー」

「そんな時は古着ですよ。私のは帯なんかも全部千円均一で揃えたし、

家で箆笥に眠ってるのが使つと言えば出てきたりするんだな。
ということとさっさと着替えて練習練習。急いで道場に集合して床掃除ね」

と主将に言われてそろそろ更衣室を後にする。
道場から更衣室が遠いのが欠点だわ。

実際に的を射るようになってから練習の密度が上がってきた。
巻藁を射るか的に向かって射るかその控えて射座の後で控えているか
矢の回収に廻っているか・・・手が空いた時に必ず水分を
補給するようになると言われているけどそれも忘れるくらい忙しい。

「ほらほら、余計なこと考えないでいいから、
上手くやるうなんて考えてもできないんだから」

先輩の叱責も以前の具体的なアドバイスをや落ち着けといったことから
より実践的なこと変わってる。3年生が出てこなくなったあたりから
2年生が気合入りまくりってのはどうなんだろう？

合宿は7月末に4泊5日だって。ランニングとかあるわけではない
けど、

授業終わってからの練習でもけっこうきついのに、

1日弓を引いているってどうなるのかなあ？

朝は座禅から始まるし、お坊さんがいるわけでもないからOBが代
役で

1年生叩くとか叩かないとか脅かしてるんだよねえ・・・
人数の少ない伯父の時代はお寺で合宿してて本当に宿坊で寝泊りし
た上で

やってたみたいだけどその名残なんだそうさ。

それにしても上達しないなあ・・・的に向かって一番前の射座につ
くと

目の前に大きな鏡があって全身が映るけど最後まで姿を見ながら
引けるわけではない。でも自分の姿が下手を表現しようとするところ
れ以上の

描写は無いくらいなのが嫌になる。

主将の凜とした佇まいも村石先輩の豪快さも新井先輩の静寂さも
平田先輩の流れるような所作も無い。

初めて矢を放ったときの固まりきった緊張感は無いにしても
制御系の壊れたロボットみたいなのが弓を引いてる。

他の武道と決定的に違うのは人を相手にしないことだと先輩に言わ
れたけど

段々その言葉の意味と重さが分かってきた。

「先輩、何かちゃちゃっと上達することみたいなのってないんですか？」

瑞恵が回収してきた矢を拭って矢立に納め、スポーツドリンクを一口飲んで先輩に聞いている

「ねーよw あれば俺がとっくにやってるし」

村石先輩がかけを外して次の回収当番に廻るためにタオルで汗を拭いながら答えた。

「自己嫌悪に陥りそうな悪寒」

「気が付かないのが当たり前なだけだし、自分が下手だと自覚できる程度には

上達してるって分かる？」

「「あ……」」

「そ。そーゆーこと。合宿終わればそれなりに見られる程度にはなるよ。」

秋か冬の始まりには自分の弓というか方向が見えてくる……かもね」

「合宿って大変そうですね……」

「1年の時は無我夢中だったな。珍しく平田先輩が本気モード入って全員涙目、

本郷さんなんか半分泣きながら……うぐっ」

村石先輩の首に切れた弓の弦が巻きついてくいと締まった。

「村石くうくん、矢の回収お願いできるかしら？」

瞳の虹彩から彩色が消えて、黒いオーラ全開、唇がつり上がって小悪魔が中悪魔にグレードアップしたように見える主将が村石先輩の耳元で囁く。

「うわ、何をやるやめd……sth」：dふじこ…ぜーっぜーっり、了解」

「うふっ 遊びに行く予定も無いし夏休みから合宿は本気モード全開で逝こうかしら」

主将がサディスティックな微笑を顔に貼り付けて弦を緩めた。

大丈夫かな、この合宿……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1287k/>

無双?・・・違います

2010年10月28日18時43分発行